

西原土地区画整理事業第1工区

第10次発掘調査報告書

(中越遺跡)

長野県上伊那郡宮田村

1991

宮田村遺跡調査会

西原土地地区画整理事業第1工区

第10次発掘調査報告書

(中越遺跡)

長野県上伊那郡宮田村

1991

宮田村遺跡調査会



1号住居址出土土器

序

西原土地区画整理事業に伴う遺跡の調査も第10次を数え、平成2年度は、中越北線の拉幅部分と、東線の一部区間の発掘へと入りました。事業に伴う一連の調査としては、かなり大規模なものであります。

その結果、東線では、縄文時代中期の住居址4軒と、竪穴2基、集石2基、土壇47基、平安時代のピット1基が検出され、縄文時代中期を主体とする多くの遺物が出土しました。中でも、遺物のうち、1号住居址の床下から、伏せて埋めた状態で出土した有孔鈔付土器は注目すべきもので、水面に生じた波紋を表現した文様を背景に、一對の蛙が、文様として貼り付けられています。蛙文様を有孔鈔付土器に付ける例は他にもあり、郡下でも3例目の発見ではありますが、これほど生き生きと、しかも写實的に表現された蛙の姿が、完全に近い形で見られるのは他に例がなく、特筆すべき資料といえましょう。また、当地区から平安時代の遺構がみつかったのも、初めてのことであります。

一方、中越北線の調査では、縄文時代前期の竪穴1基と、縄文時代中期の住居址2軒、土壇29基が発見され、従前の調査とあわせて、縄文時代前期の範囲の東端の様相を知ることができました。

このように、今回の調査でも多くの成果をあげることができたわけですが、それも、宮田村遺跡調査会会長友野良一先生をはじめ、現場で発掘作業にあたられた皆さんの努力なくしては、成し得なかったものであり、ここにその事を記し、感謝の意を表する次第であります。

1991年3月15日

長野県上伊那郡宮田村教育委員会

教育長 林 金茂

例 言

1. 本書は、平成2年7月23日から11月17日まで実施した、西原土地区画整理事業に伴う、第10次発掘調査の報告書である。
2. 調査は、宮田村（村長 伊藤 浩）の委託を受け、宮田村遺跡調査会（会長 友野良一）が実施した。
3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
4. 遺構実測図や遺物実測・拓影図は、次のように縮小率を統一した。
遺構全体図……1/1000・1/200 住居址・土壙……1/60 集石……1/40 塚……1/20
縄文土器……1/6 縄文土器拓影……1/3 土製品……1/2 平安時代土器……1/4
5. 図のうち、縄文土器拓影図中の断面白ヌキは繊維土器、平安時代土器実測図中の、断面白ヌキは土師器、ドットは灰釉陶器、黒は須恵器で、内面ドットは黒色土器である。
6. 報告書作成にあたっての分担は次のようである。
本文執筆……友野良一・小池孝
遺構・遺物実測・トレス……小池孝・酒井艶子・平沢きくみ
採拓・拓影図作成……林美弥子・平沢きくみ・酒井艶子・小池孝
写真撮影・図版作成……友野良一
編 集……小池孝
7. 本調査にかかわる記録や図書類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

第1章 遺跡の概観と調査の経過	1
第1節 遺跡の立地	1
1 自然環境・地質	1
2 歴史環境	2
第2節 調査の経過	3
第2章 遺構と遺物	7
第1節 中越北線の遺構と遺物	7
1 2・3号住居址	7
2 1号竪穴	8
3 土 壌	8
4 遺構外の遺物	9
第2節 東線の遺構と遺物	14
1 住居址	14
1) 1号住居址 2) 4号住居址 3) 5号住居址 4) 6号住居址	
2 竪 穴	18
1) 2号竪穴 2) 3号竪穴	
3 土 壌	19
4 集 石	24
1) 1号集石 2) 2号集石	
5 ビット	26
6 遺構外の遺物	26
第3章 発掘調査の成果とまとめ	28

插图目次

- 图1 位置图
- 图2 调查范围图
- 图3 中越北線遺構全体图
- 图4 2·3号住居址实测图
- 图5 1号竖穴实测图
- 图6 土壤实测图(1)
- 图7 土壤实测图(2)
- 图8 土壤实测图(3)
- 图9 1号住居址实测图
- 图10 1号住居址炉·伏甕断面图
- 图11 4号住居址实测图
- 图12 5号住居址实测图
- 图13 5号住居址炉实测图
- 图14 6号住居址实测图
- 图15 6号住居址炉实测图
- 图16 2号竖穴实测图
- 图17 3号竖穴实测图
- 图18 土壤实测图一部分—(1)
- 图19 土壤实测图一部分—(2)
- 图20 1号集石实测图
- 图21 2号集石实测图
- 图22 1·4号住居址出土土器实测图
- 图23 5·6号住居址、土壤出土土器实测图
- 图24 遺構外出土土器实测图
- 图25 2·3号住居址、1号竖穴出土土器拓影
- 图26 中越北線土壤·遺構外出土土器拓影(1)
- 图27 中越北線遺構外出土土器拓影(2)
- 图28 中越北線遺構外出土土器拓影(3)
- 图29 1号住居址出土土器拓影
- 图30 4号住居址出土土器拓影
- 图31 5·6号住居址出土土器拓影

- 図32 2・3号竪穴、東線土壇出土土器拓影(1)
- 図33 東線土壇出土土器拓影(2)
- 図34 東線土壇出土土器拓影(3)
- 図35 東線遺構外出土土器拓影(1)
- 図36 東線遺構外出土土器拓影(2)
- 図37 東線遺構外出土土器拓影(3)
- 図38 東線遺構外出土土器拓影(4)
- 図39 東線遺構外出土土器拓影(5)
- 図40 東線遺構外出土土器拓影(6)
- 図41 東線遺構外出土土器拓影(7)
- 図42 東線遺構外出土土器拓影(8)
- 図43 東線遺構外出土土器拓影(9)
- 図44 東線遺構外出土土器拓影(10)
- 図45 東線遺構外出土土器拓影(11)
- 図46 東線遺構外出土土器拓影(12)
- 図47 土製品・平安時代の土器実測図

付図1 中越北線遺物出土状態図

付図2 東線遺構全体図

写真図版目次

- 図版1 遺構 1号住居址調査中 1号住居址
- 図版2 遺構 2号住居址 2号住居址炉址 3号住居址 2・3号住居址
- 図版3 遺構 4号住居址 4号住居址遺物出土状況
- 図版4 遺構 5号住居址 6号住居址
- 図版5 遺構 M22・23地点 M28～30地点 M31・32地点 M34・35地点
- 図版6 遺構 M36～42地点 M43・44地点 M47・48地点
- 図版7 遺構 M51～55地点 M57～59地点 M57地点溝状遺構
- 図版8 遺構 N22・23地点 N29～31地点 N31～33地点
- 図版9 遺構 N33～35地点 N34～37地点 N38・39地点
- 図版10 遺構 N43～45地点 N54地点 N55地点
- 図版11 遺構 N36地点 N57地点 N57～59地点
- 図版12 遺構 N60～62地点 N62・63地点 N64地点

図版13	遺構	I 27-a 2	I 27-c 2	I・J-27地点	J 27-b 2	J 27-d・e 2				
図版14	遺構	1号土壌	7号土壌	17号土壌	20号土壌	22号土壌	24号土壌	26号土壌	31号土壌	
図版15	遺構	33号土壌	37号土壌	38号土壌	39号土壌	40号土壌	43号土壌	44号土壌	45号土壌	
図版16	遺構	48号土壌	49号土壌	51号土壌	54号土壌	58号土壌	60号土壌	68号土壌	69号土壌	
図版17	遺物出土状態	122	349	176	470	468	2,957	104	18	
図版18	遺物出土状態	1号住伏甕	1号住伏甕	4号住炉	3,906	587	1,393	1,569	116	
図版19	遺物出土状態	303	4,110	476	1,594	1,422	270	127	114	
図版20	遺物	縄文土器								
図版21	遺物	縄文土器								
図版22	遺物	縄文土器								
図版23	遺物	縄文土器								
図版24	遺物	縄文土器								
図版25	遺物	打製石斧								
図版26	遺物	粗大石匙・礫石錘	石鏃							
図版27	遺物	石皿・磨石・鉄さい	敲打器							

第1章 遺跡の概観と調査の経過

第1節 遺跡の立地

1 自然環境・地質

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の北側の扇側部、扇端である天竜川河岸から約1kmの地点に位置している。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いく筋もの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明瞭にし始める地点でもある(図1)。

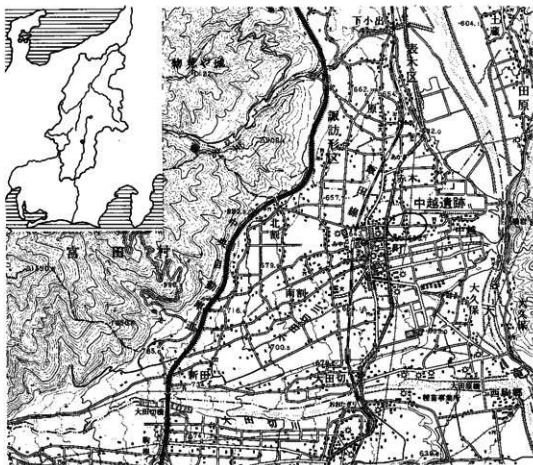


図1 位置図(5万分の1)

この台地の上面の地形は、両河川の侵食等によって様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面で構成されており、後者はさらに、やや低い南側と高い北側とに分けることができる。遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小規模な流れ、あるいは溝が確認されており、また、平坦に見える地点での腐植土層の厚さも一定でなく、現地地形はかなり改変が加えられているように見うけられ、本来は、起伏に富んだ地形であったことが想定される。遺跡地は宅地化が進み、現在も、進行中の土地区画整理事業の完了を待つことなく住宅が建てられつつあるが、昭和40年代以前は一面の畑地で、しかも、古い集落である中越から見た呼称である「西原」が、一帯の字名として定着していることから、畑地であった歴史は極めて長かったと考えられ、このことも、地形が人為的にかえられてきた原因であったろう。遺物採集の適地として古くから知られており、遺物の保存状態は決して良くはない。

遺跡付近の土中には、太田切扇状地を構成する人頭大から拳大の礫が多く、所によっては集中しており、表土下が礫層となる地点もある。しかし、表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐植土の深い部分では黒褐色土の上に黒色土が存在し、浅い部分では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるか、ごく薄い。

また現在は、ほ場整備等によりすべて枯れてしまったが、台地北縁に湧水があり、中央グランド付近にも、かつては湧水があったとのことであり、これ等の水が、この地に集落を形成せしめた大きな力であったことはまちがいない。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に位置する縄文前期中越式期を中心とする集落と、同じ台地の南縁に連なる縄文中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集落遺構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

2 歴史的環境

大沢川と小田切川にはさまれた台地上面のほぼ中央には、先に述べた居住性の良さを証明するように、古くから連続と続く遺跡が確認されている。すなわち、中越遺跡で村内に2例しかない先土器時代の尖頭器が採集されていることから始まり、縄文草創期～早期の住居址の検出された向山遺跡。縄文前期と中期の大集落が営まれ、縄文後期の墓域も確認されている中越遺跡。弥生後期の大集落である姫宮遺跡。発掘調査されていないが、奈良時代の終わりから平安時代を通じた集落が想定されている田中下遺跡などがそれである。さらに、カラス林・三つ塚の古墳群もまた、まさにこの台地を見おろしており、この付近の中核都市が、常にこの地に存在し続けてきたことがわかる。江戸時代の人為的町並みである宮田宿を、これ等の遺跡の集中する範囲のほぼ中央を選んで設けたのは、象徴的出来事といえよう。

第2節 調査の経過

1 調査にいたるまで

昭和54年に策定された西原地区区画整理事業は、昭和62年に着工にいたり、現在も継続中であるが、それに伴って埋蔵文化財を保存する必要が生じたため、宮田村教育委員会では、宮田村遺跡調査会を組織し、発掘調査を実施して記録保存をはかってきた。

本報告の平成2年度の調査は、第10次西原地区埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成2年7月16日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会（会長友野良一）を受託者、宮田村教育委員会（教育長林金茂）を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成2年7月16日から平成3年3月15日までを委託期間としている。

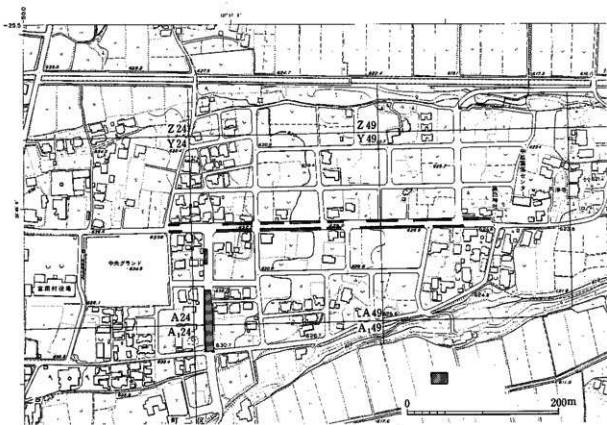


図2 調査範囲図（宮田村「宮田村平面図5」平成元年12月作成による）

調査地点は、中越北線の国道から東へ220m地点から640mまでの拡幅部分（片側3m）の調査可能な範囲と、同線の国道から東へ270m地点から南へ延びる東線の一部（幅12m、長さ80m）の2箇所である（図2）。

2 調査の組織

今回の発掘調査は、次のような組織によって実施された。

○宮田村遺跡調査会

調査会長	友野 良一
調査会員	宮木 芳弥
＃	青木 三男
＃	片桐 貞治
＃	唐木 哲郎
＃	平沢 和雄
＃	伊東 醇一
教育長	林 金茂

○調査会事務局

教育次長	小林 守
係 長	古河原正治
係	小池 孝

また、現場の発掘調査では、以下の方々に御協力頂いた。

伊藤茂子 木下道子 小田切守正 酒井艶子 白鳥あき子 西村アグ子 原毅 林美弥子 平沢きくみ 松下未春 向山一男。

3 調査の経過

調査は7月23日に開始し、11月17日まで、途中わずかな中断はあったものの、継続して発掘を実施し、以後、3月15日まで遺物整理と報告書作成にあたった。発掘では、調査範囲が長大であることと、除土の置き場を長期にわたって確保することが不可能であったため、20～30mから、時には数mごとに区切って調査し、発掘と埋めもどしをくり返す方法をとらざるを得なかった。その際、可能な地点では、用地外を借用し、シートを敷いた上にコンパネ（10mm）を並べて除土置き場とする方法をとった。

遺物は、出土地点とレベルを記録してとり上げ、遺構全体図や調査範囲は40分の1の実測図を作成するのを基本とし、必要に応じて20分の1、10分の1の実測図を作成した。

昭和53年の中越遺跡範囲確認調査に先立って、遺跡地には10m方眼のグリッドが設定されている。中越北線上に東西に基準線を設置し、それをM列とN列の界として南からA～Z、さらに南へはA₁、A₂、A₃……とし、国道西側の基準点から東へ00、01、02……としてあるもので、それによって表現すると、中越北線の調査範囲は、M・N列の22～64グリッド、東線の調査範囲は、26・27列のA～EおよびA₁～A₄グリッドということになる。本書中での遺構の位置も、このグリッドで表現してある。

調査では、中越北線に打ちこまれている複数の基準点からグリッドを割り出した。

以下、日誌によって調査経過の概略を記しておきたい。

○調査日誌より

- 7・23 上物が除去された、東線のA-C-26・27グリッド地点から調査を開始する。中越北線に設定されている基準線からグリッドを割りだし、同線上のベンチマーク(632.165m)からレベルを設置する。遺構の存在を早くつかむため、まず、用地の東縁と西縁をトレンチ状に、耕作土を含めた表土を重機で除土する。北半は、表土下がすぐ黄色土となり、遺物も出土しない。
- ・24 A27グリッド北半に1号住居址を確認する。28日に調査終了。建て替えがあり、新住居址は旧住居址に貼り床して拡張すると共に、炉に土器を埋設し、南西壁ぎわに逆位に有孔鈣付土器を埋めてある。
- ・30 中越北線に入る。道路南側のM-47~49地点から調査を開始し、8月3日までにM59地点まで調査終了する。除土の置き場として借用した南の用地外に、シートを敷き、コンパネを並べて置き場とする。4~8号土壌検出。
- 8・8 M37~41地点の調査に入る。13日~16日の休みの後、M41・42、M34~36、M31・32地点と調査して10~14号土壌を検出し、22日に中越北線の南側の調査を終わる。
- ・27~30 M・N-22~30区間の調査可能な部分を発掘。いずれも混乱が著しく、表土も浅い。
- ・31 中越北線の道路北側に入る。N31~33地点を調査し、N33グリッドで2・3号住居址検出。9月1日、両址の調査終了。
- 9・4 N34~36区間を調査し、15・16・18~20号土壌、1号竪穴を検出。
- ・6 N38~42区間に入る。用地外に除土置き場が確保できなかったため、やむをえず用地を4mごとに区切ってグリッド状に調査する。17・21~29号土壌を検出すると共に、中越北線の中では、最もまとまった量の遺物包含層を確認する。19日終了。
- 9・18 N48~52地区に入る。遺構は検出されず25日に終了。
- ・22 N54~59地区に入り、30~32号土壌を検出した後、N60~64地区を調査し、28日、中越北線の調査を終了する。
- 10・1 東線にもどり、南北に長い用地を、グリッドに従って10m幅で切った区画ごとに調査することとし、A26・27グリッドから開始する。
- ・3 4号住居址を検出する。石囲炉内に平出Ⅲ類Aの土器を埋設しており、9日に調査終了。
- ・4 A₂26・27グリッドの除土を開始する。黒色土から黒褐色土へと移行する厚い遺物包含層があり、調査に手間取ったが、22日までに包含層の掘りさげを終わり、遺構を検出する。33~49・71~74号土壌、1・2号集石を確認し、24日に測量を終える。
- ・24 A₂26・27グリッドを調査し、75・76号土壌を検出して25日に終える。完形の灰釉陶器(Ⅲ)

が出土したが、関連遺構は検出されず。

- ・26 A₁26・27グリッドの調査を開始し、5・6号住居址、2号竪穴、50～52号土壌を検出し、11月5日に調査を終える。
 - ・29 中越北線のN43～45地区の調査。遺構は検出されず。
- 11・5 A₁26・27グリッドの調査開始。53～60号土壌を検出し、7日に調査を終える。
- ・6 D26・27グリッドの除土を開始し、3号竪穴、61～66号土壌を検出して7日に調査を終える。
 - ・8 I・Jグリッド区間にグリッドを設定し14日に調査を終える。
 - ・10 E26・27グリッドの除土を開始し、67～70号土壌を検出して14日に調査を終える。
 - ・17 現場での調査を終了し、28日まで、作業場にて遺物の水洗と注記をする。
 - ・29 資材を運搬し、現場テントでの作業を終了する。
- 12・5 宮田村総合福祉センターにて、遺物、現場実測図の整理を開始、報告書作成に入る。
- 3・31 報告書刊行。

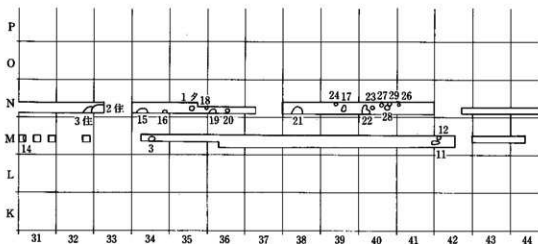


図3 中越北線遺構全体図(住:住居址、タ:竪穴、他は土壌)

第2章 遺構と遺物

第1節 中越北線の遺構と遺物

1 2・3号住居址

N32・33地点に検出され、3号住居址の東側を2号住居址が切っている(図4)。

2号住居址は、東側を区画整理の道路開設時に破壊され、南側は中越北線の道路敷下にかかる

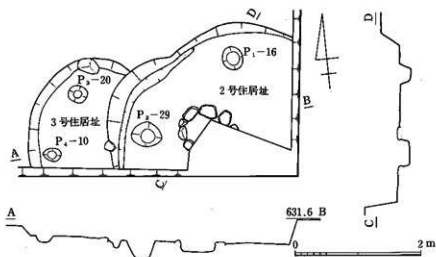
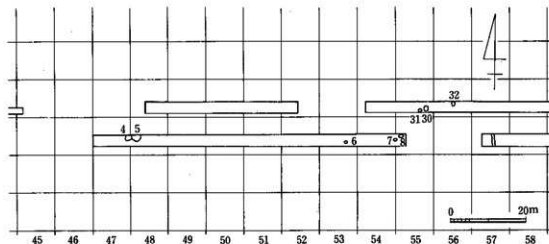


図4 2、3号住居址実測図



ため平面形は不明だが、径3.5m前後の規模と推定される。埋土は黒褐色で、赤褐色の3号住埋土とは明らかな時期差が見てとれた。床面は中央部がかなり硬く踏み固められており、中央やや北東寄りに炉がある。電柱埋設工事のため東南側が破壊された炉は石囲炉で、北東側の炉石は上面を平らに据えてある。柱穴はP₁・P₂の2本が検出された。

遺物はごく少なく、土器は26点で量的には中期初頭(図25-1~8)が多いが、中期末葉(9~11)の大破片がある。石器は礫石錘1点のみである。中期初頭の遺物包含層に近いことから、縄文中期末葉の住居址としておきたい。

3号住居址は、南側が中越北線の道路敷下にかかっているため、平面形・規模共不明である。炉址もみつからない。遺物はごく少なく、7点の土器はすべて縄文中期初頭(16~22)で、石器には打製石斧1点、黒曜石の剥片3点がある。縄文中期初頭の遺構であろう。

2 1号竪穴

N35地点に検出された丸味をもった方形を呈する深い竪穴で、1辺1.4m、検出面からの深さ86cmを測る。検出面より少し上層の中央部に黄色土がブロック状に、また埋土中位には、中央がより褐色がかかった赤褐色土の層があり、人為的に埋めもどされたようにも見うけられる(図5)。赤褐色土より上層から縄文前期初頭と中期初頭の土器が混ざって、下層からは前期初頭の土器のみが出土している。

遺物は多くないが、土器は、縄文前期初頭(図25-23~32)が大部分で、中期初頭(33・34)がわずかある。周辺をみても前期の遺物が比較的多い地点ということができ、縄文前期初頭の遺構としたい。ただ、先述した土器の出土状態から、上層部は、時間をおいて埋没したものと考えられる。

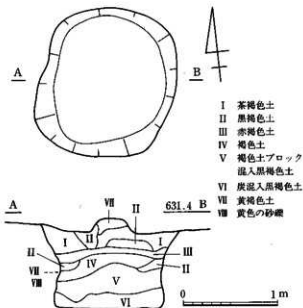


図5 1号竪穴実測図

3 土 壤

中越北線の調査範囲から検出された土壌は29基を数える。はじめに東線の一部を調査したことで、9号が欠番となったため、3~8・10~32号土壌がそれである。土壌は、N列の34~41区間に集中しているように見える(図3)。それは、比較的まとまって遺物が出土する範囲であり、その包含層と土壌との間に相関関係があるとすることもできるが、別の見方をすれば、遺構が検出

される付近が、保存状態が良い範囲とすることもでき、一概には言い切れない。というのも、図でわかるように、土壌の中には、検出時の形態が浅い凹み程度のものがかなりあるわけで、土壌部分の浅い地点では、破壊等により検出が困難な場合があると思われるからである。

所属時期を特定できた土壌はごく少なく、10・15号土壌の2基だけである。以下、特筆すべき二、三の土壌について記しておきたい。全体は一覧表にまとめてある。

1) 10号土壌

M40グリッドに検出されたが、残念ながら出土地点と形態を図示する資料がない。85×50cmの、三角形に近い平面形をもつ土壌で、深さ20cmと比較的浅い。埋土から縄文中期中葉新道式土器の把手部分2箇所と頸部片(図23-4)が出土している。それ等は土壌内に埋置されたものであり、該期の土壌としていだろう。

2) 11号土壌

M41からM42グリッドにかけて検出された230×165cmの細長い楕円形を呈する土壌で、遺物は無い。この土壌を起点とするようにして東方へ延びる溝がある。

3) 15号土壌

N34グリッドに検出された。南半が道路下にかかるため推定だが、規模は260×200cm程度の大型となろう。検出面からの深さは21cmと浅く、内部に特別の施設はない。埋土から15点の縄文中期の土器と打製石斧1点が出土しており、細分できたものはすべて中期初頭であった。該期の土壌である。

4) 17号土壌

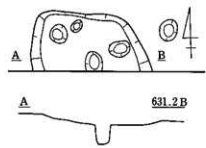
N39グリッドに検出された径120cm、深さ33cmの土壌で、所属時期は特定できない。土壌から北方へ溝が延びている。

4 遺構外の遺物

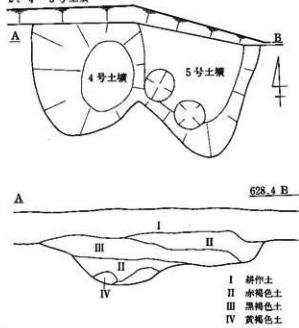
土器からは、N35グリッドを中心にN34~36グリッドにわたる縄文前期初頭(図26-30~43)の包含層、N34からN41の広範囲に広がる、それほど濃密ではない縄文中期初頭(図27-1~25)の包含層、N40に最も多くN41にかけてかなり濃密に集中する、縄文中期中葉(26~32・図28-1~7)を含む縄文中期末葉の包含層を指摘できる(付図1)。M48からM50グリッドに中期末葉の小規模な包含層を考えることも可能であろう。このうちN35には、縄文前期初頭の1号竪穴があり、前期初頭の包含層は明らかにそれとの関連が深い。図24-1の平出Ⅲ類A群は、N40グリッドから出土した胴部完形品である。

石器は、打製石斧19点、磨製石斧4点、礫石錘6点、横刃型石器5点の他、石鏃・石匙・敲打器各1点が出土しているが、N40グリッドから打製石斧6点、N41グリッドから礫石錘5点が出土するなど、土器量を反映してN40・41グリッドに最も多い。また、そこから西方のN35グリッドにかけては、一定量の黒曜石剥片類が出土している。

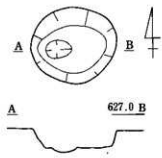
1、3号土壤



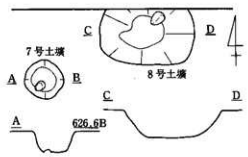
2、4-5号土壤



3、6号土壤



4、7-8号土壤



5、11-12号土壤

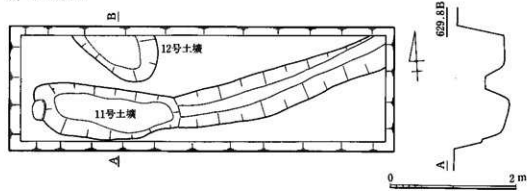
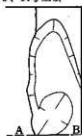


图6 土壤实测图(1)

6、14号土塙

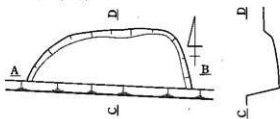


A 632.4B



- I 耕作土
- II 攪乱
- III 赤褐色土
- IV 濃い赤褐色土

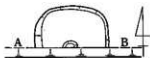
7、15号土塙



A 631.4B



8、16号土塙

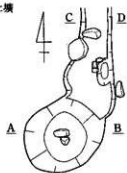


A 631.6B

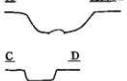


- I 耕作土
- II 黒褐色土
- III 茶褐色土

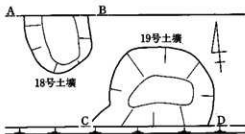
9、17号土塙



A 629.4B



10、18・19号土塙

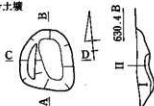


A 631.0B C D



- I 埋め土
- II 表土
- III 黒褐色土
- IV 褐色土
- V 黄色がかった褐色土
- VI 黒色がかった褐色土
- VII ローム小ブロック混入黒色土
- VIII 攪乱

11、20号土塙



630.4B



- I 黒褐色土
- II 黄褐色土

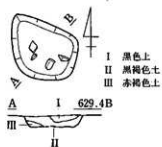


図7 土塙実測図(2)

12、22·23号土坑



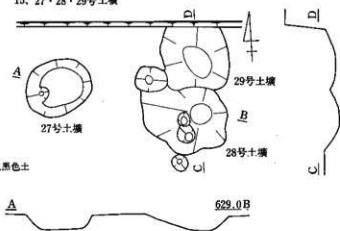
13、24号土坑



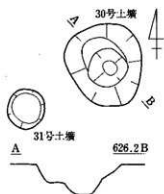
14、26号土坑



15、27·28·29号土坑



16、30·31号土坑



17、32号土坑

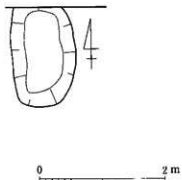


图8 土坑实测图(3)

ただ、土壌の項で述べたように、N34からN41グリッドにかけては、包含層の保存状態が良い範囲ということもできるわけで、その点は考慮する必要があらう。特筆すべき遺物として、N55グリッドから土偶の頭部(図47-1)が出土している。

中越北線土壌一覧表

番号	位置	平面形	口径 cm	底径 cm	深さ cm	備考
3	M34	楕円	190×(130)	150×(110)	17	道路敷にかかると。内に小ビット4。前期初頭4(図26-1~4)。
4	M47	"	(220)×170	160×80	112	道路敷にかかると。内に小ビット2。中期初頭3・末葉1(5~8)
5	M48	"	(280×230)	(190×170)	99	道路敷にかかると。内に小ビット2。中期初頭1(9)
6	M53	円	135×125	110×75	38	内に小ビット。
7	M54・55	"	60×60	40×40	18	内に小ビット。
8	M55	楕円	155×(110)	70×40	44	道路敷にかかると。
10	M40	三角	85×50	65×45	20	中期中葉1(図23-4)。
11	M41・42	長楕円	230×165	185×110	42	
12	M42	楕円	(160×100)	(100×60)	63	道路敷にかかると。
13	M40	"	120×85	95×75	15	
14	M31	長楕円	180×90	165×75	62	
15	N34	楕円	(260×190)	(240×170)	21	道路敷にかかると。中期15(初頭9)(図26-10~19)・打石斧1
16	N34	隅丸方	110×(110)	100×(100)	40	道路敷にかかると。
17	N39	円	120×115	75×70	33	前期初頭1・中期末1(20・21)。
18	N35	楕円	(140)×100	(110)×55	43	用地外にかかると。前期初頭1・中期1
19	N36	"	165×-	100×50		道路敷にかかると。
20	N36	不整円	90×85	55×55	22	中期初頭1
21	N38	楕円	(300×200)	180×170	43	道路敷にかかると。前期初頭1・中期9(初頭2・中葉1・末葉1)(22~24)・敲打斧1
22	N40	不整	(230)×190	75×70	41	道路敷にかかると。中期初頭2・末葉1(25)
23	N40	円	70×65	50×45	12	
24	N40	"	105×90	85×75	17	
25	N41	"	50×45	20×15	46	
26	N41	"	50×40	30×25	34	
27	N40	"	105×85	80×70	35	中期1(26)
28	N40	"	135×110	35×30	22	内に小ビット3中期初頭1・中葉1
29	N40	"	(130)×100	55×40	17	
30	N55	"	120×110	80×65	47	中期末葉1(29)
31	N55	"	65×60	45×45	30	
32	N56	楕円	150×95	120×70	15	

口径・底径のカッコ内は推定値。

第2節 東線の遺構と遺物

1 住居址

1) 1号住居址

A27グリッド北西隅に検出された建て替えのある住居址で、東線用地内では最も台地中央寄りに位置している(図9)。新址は、旧址の床上7~8cmに貼り床し、東側を50cm程拡張してあり、平面形は南東に長軸線をおく5.8×5.0mの楕円形を呈する。長イモ等の耕作による攪乱が黄色土まで達していたため検出に手間どり、床上15cm内外で平面形を確認したが、周囲の状況から、50

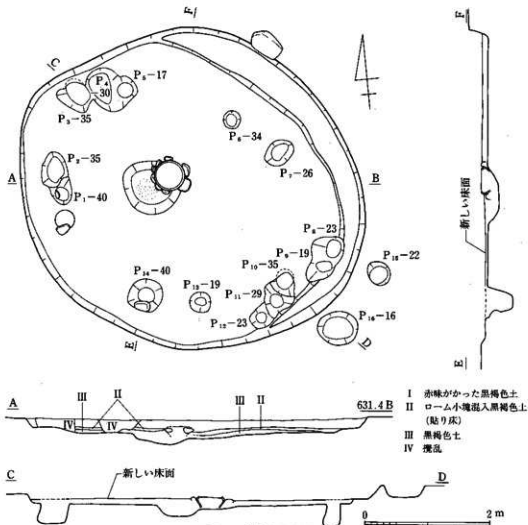


図9 1号住居址実測図

cm以上は掘りこんで築かれたものと
考えられる。埋土下層は黒褐色土で
ある。床面は、貼り床部分は堅いも
のの埋土が剥がれるような状態に
はなく、特に西側は、貼り床を面と
して確認出来なかった部分もあった。
従って、床面検出時に柱穴かと思わ
れる部分がいくつかあったが、それ
と断定するまでにはいたらなかった。

拡張された部分の床面も軟らかい。炉は、破損したものであろう1個体の深鉢を利用しており、
床に5片の胴部大破片を敷いた上に、破損をまぬがれた口縁から頸部を据え、周囲に拳大の礫を
詰めるように並べてある。内部に焼土粒を含む黒褐色土がわずか見られた程度だが、土器の口唇
部は二次的な劣化が著しい(図10)。西壁下に、胴下半部が上半部にかぶさるようにつぶれた状態
の伏甕がある。南側にずり落ちたような状態で小ぶりの平石があり、蓋石とも考えられる。東壁
外に2個のピットがある。

旧址の形態は新址と相似しており、南東に長軸線をおく5.4×4.4mの楕円形を平面形とし、床面
は軟らかい。ほぼ中央に底面の焼けた径90cmの浅いピットがあり、破壊された炉の跡と考えられ
るが、その形態はわからない。配置から、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_8 \cdot P_{10} \cdot P_{14}$ を旧址の柱穴と考えてみた。
そうすると、 $P_2 \cdot P_4 \cdot P_7 \cdot P_{10} \cdot P_{14}$ の組み合わせを、新址の柱穴としてもいじらう。

新址の埋土から出土した遺物はさほど多くなく、2個の埋設土器と3個の図化した土器(図29-
1~5)の他は、140点の土器片と、打製石斧1点、磨製石斧2点、礫石錘2点、敲打器・横刃型
石器各1点の石器、黒曜石剥片類15点が出土している。炉に埋設されていた土器(4)は井戸尻
I式であろう。伏甕(5)は底部を欠く有孔銅付土器であり、やや細目の体部には、水面に波紋
を広げながら泳ぐカエルが1対、厚く貼りつけた粘土によって、極めて具像的に描かれている。
またこの土器には、外面の肩部に赤色塗彩が施され、内外面には煮沸具としての使用痕(ヌスと
オコゲ)も残っている。3は古く、4は焼成の良くない小型の浅鉢で、太い隆帯で体部を飾っ
ているが、痕跡しか残っていない。破片は、縄文中期中葉(図29-4~22)が最も多く、細分でき
た土器片の7割近くがそれで、中期末葉(24~26・28・29)がそれに続き、縄文前期(1)中期
中葉(2・3)、後期がわずかある。

新址は、埋設されていた2個体の土器から、縄文中期中葉井戸尻I式期の住居であり、旧址は
その直前に位置しているものとしておきたい。

2) 4号住居址

A26・27グリッドに検出された住居址で、1号住居址の南に位置している(図11)。平面形は五
角形にも見える不整形で、東西5.3m、南北5.0mを測る。検出面が北西から南東へ傾斜してお

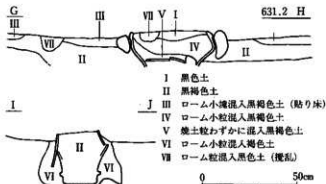


図10 1号住居址炉・伏甕断面図

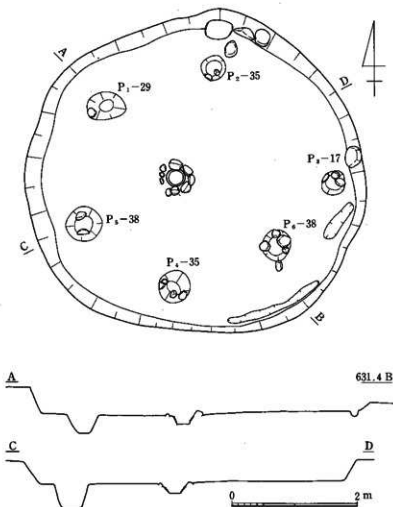


図11 4号住居址実測図

り、壁高は、高い所で40cm、低い所で15cm程度である。壁はゆるく立ち上がり、 $P_1 \sim P_6$ の6本を柱穴と考えた。その壁面や柱穴内には、黄色土層中に存在していた拳大から人頭大の礫が多数顔を出しており、床面も平坦でなく、住居構築時には、かなりの労力が費やされたのではないと思われる。炉は中央やや西寄りに位置し、石囲いの中央に土器を埋設する点では1号住居址と同様だが、土器が石より低く埋置されており、やや趣きを異にする。南東壁下に周溝がわずかある。

遺物は、今回調査した中では最も多いが、土器360点と、打製石斧・礫石錘各1点の石器が出土した程度である。炉に埋置されていた土器(図22-6)は中期中葉の平出皿群A類の頸部で、口唇部はやはり劣化が著しい。破片を上層と下層に分けてみると、上層では細分可能な90点の縄文中期の土器のうち、6割が末葉(図30-7~10)で中葉(3-6)が3割だが、下層では中葉(12-24)が7割を占めている。炉内の土器から、縄文中期中葉の住居址である。

3) 5号住居址

A₁27グリッドに検出された。南東方向への傾斜地に築かれた、南北方向に長軸線をおく隅丸方形の住居址と考えられるが、掘りこみが浅いために、東側は耕作等によって床面まで破壊された状態にあり、南壁と、北壁の東側も検出することはできなかった。柱穴の位置と確認できた床面の範囲から、規模は3.5×2.8m程度と推定した。検出面までの壁高は高いところで15cm

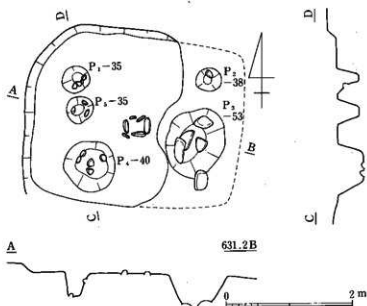


図12 5号住居址実測図

程度である(図12)。床面は、堅くはないが黄褐色土混入黒褐色土によってタタキ状に整えてあり、それによって南限を知ることができた。柱穴はP₁~P₄の4本と考えたが、P₃・P₄は柱穴としては大きすぎよう。炉は、細長い石を立てて組んだ小型の長方形石囲炉で、炉内に焼土はない(図13)。

遺物はごく少なく、38点の土器は縄文中期初頭から後期までが混在している(図23-1・図31-1~9)。ただ、打製石斧4点、礫石錘1点、横刃型石器1点の石器があり、注意される。所属時期は断定できないが、炉の形態や打製石斧の多さは6号住居址と似ており、縄文中期初頭とすることも可能であろう。

4) 6号住居址

A₁・A₂6グリッドに検出された住居址で、西側は用地外となる(図14)。平面形は東南東方向に長軸線をおく楕円形で、5×4m

程度の規模となろう。検出面からの深さは30cmだが、付近は耕作土下が黄褐色となっており、上方は耕作等により削られているのだろう。埋土は赤褐色を呈する。床面は、黄色土中に存在していた多数の礫を取り去った後に平坦に整えているようで、全面に黄色土ブロック混入褐色土によるタタキが見られた。南壁にかかる径1.3mのピットを黄色土ブロック混入褐色土で埋め、P₇の北側も同様にして埋められている。炉はほぼ中央にある長方形石囲炉で、西半の石が抜き取られていたほか、炉の東側の床面が焼け、炉床にも焼けた部分があった(図15)。

遺物は多くない。土器は150点で、縄文中期初頭梨久保式の大破片(図23-2)と瀬戸内系の中

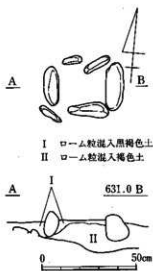


図13 5号住居址炉実測図

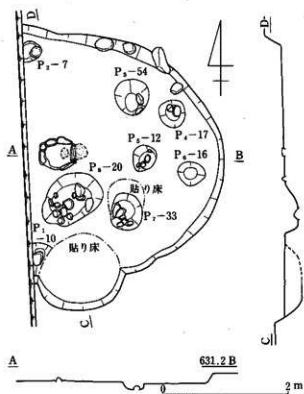


図14 6号住居址実測図

期初頭(3)の他は小破片で、量的には中期末葉(図31-13~28)が最も多く、中期末葉(29~31)や中期初頭(10~12)は少ない。石器は、打製石斧6点、横型石器5点、礫石錘1点の他、硬砂岩や緑泥片岩類の剥片7点、黒曜石の剥片類が9点と、他の住居址に比べると多い。大破片の土器から、縄文中期初頭の住居址としておきたい。

2 竪穴

1) 2号竪穴

A₁26グリッドに検出されたが、西側は用地外となっている。平面形は径1.2mの円形と推定され、土壇と差

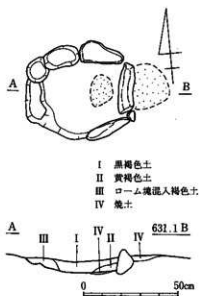


図15 6号住居址炉実測図

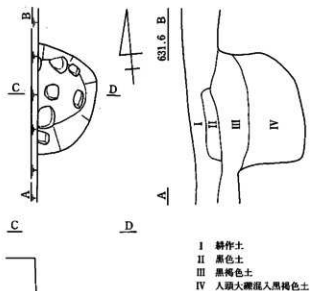


図16 2号竪穴実測図

はないが、検出面からの深さ75cmと深い。黒褐色の埋土には、人頭大の礫が多数混入している。断面図によるとやや袋状で底面は南へ傾斜し、底面や壁には、大きな礫が顔を出している（図16）。

遺物は、埋土から縄文中期中葉から末葉の3点の土器（図32-1～3）と打製石斧1点が出土している。

2) 3号竪穴

D26グリッド内の南端、用地西縁近くで検出された。平面形は南北に長い不整形円で、規模は1.1×0.9mとやはり土壌とかかわらないが、検出面からの深さは64cmを測る。北側が屈曲してゆるく立ち上がっており、東側は袋状となっている（図17）。

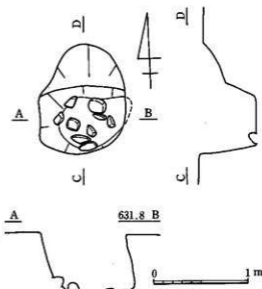


図17 3号竪穴実測図

埋土から縄文中期中葉の土器（図32-4）2点と、礫石錘1点が出土している。

3 土 壌

東線から検出された土壌は47基ある。平面分布では、A₂26グリッド北半からA₂26グリッド、A₂27グリッド北半にかけて集中する部分があり、D・Eグリッド内にも散見される。

土壌が集中する地点は、厚い包含層の存在する地点と一致する。包含層下面は、幅15m程度の北東方向へのゆるやかな溝状を呈しており、その溝状の部分に土壌が集中していることになる。土壌の掘り方はしっかりしており、完形土器を伴うと判断されるものもある。一方北端のD・Eグリッド内の土壌は、浅い凹みの域を出ない。また、1号住居址の北方には土壌がないが、現在この一帯は耕作土下が黄褐色土であり、微高地となっていたところの表土が削られたことにもよるであろう。

以下、溝状部分の土壌群の中の、主要な土壌をとりあげ、記述しておきたい。なお、本文中には、土壌群の部分図（図18・19）しか掲載していない。全体の分布や個々を取りあげなかったものについては、東線全体図（付図2）によらねたい。また、遺構図中には多くの礫があるが、45号土壌のそれ以外は、いずれも黄褐色土や黄色土層中に元米含まれていた、いわゆる「地山」の礫である。土壌の全体は一覧表にまとめてある。

1) 38号土壌

径130cmの円形の土壌で、深さ44cmと深い。壁に大礫が顔を出し、底面には敷きつめたように礫が存在しているが、いずれも黄色土中に入ったものである。遺物は多い。縄文中期末葉を中心に

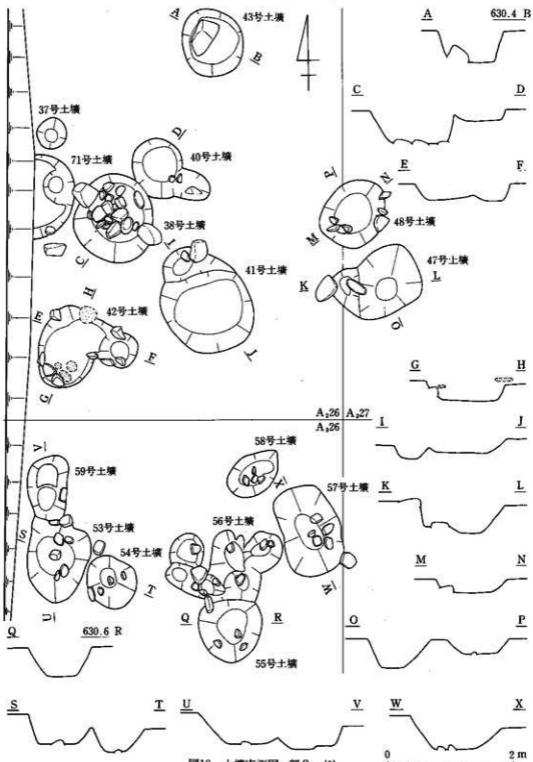


图18 土壤实测图一部分(1)

37、38、40~43、47、48、53~59、71号土壤

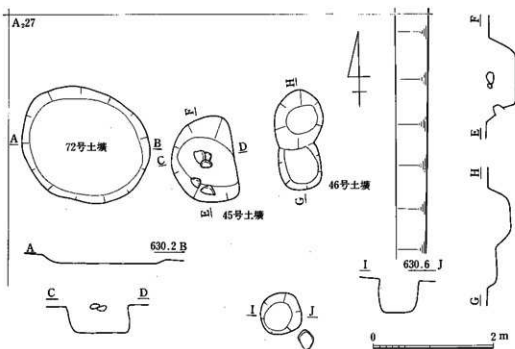


図19 土壌実測図一部分(2) 45・46・72号土壌、P₁

中期初頭から後期までの土器片約60点(図32-15~31)と、石鏃2点、打製石斧・礫石錘・横刃型石器・叩石各1点の石器が出土している。土器片の時期別構成は包含層下位のそれと差がなく、上層の包含層出土と同一個体(図32-27と図38-21、図32-28と図39-1)もあることから、土壌埋没と包含層形成は、時期を同じくするものと考えられる。

2) 41号土壌

38号土壌の南東に位置し、平面形は175×135cmの楕円形となっているが、浅いトライ状のビットの北西に、より深い小型のビットが付属する形である。縄文中期初頭と末葉の土器(図33-3~6)が出土している。

3) 42号土壌

41号土壌西の用地縁に近く検出され、楕円形のトライ状のビットの横に小型のビットが付属している。楕円形の部分の両端2箇所には、底面より浮いて焼土が検出されている。遺物は比較的多く、縄文中期初頭から末葉までの土器(7~11)17点が出土している。

4) 43号土壌

土壌群の中では最も北西寄りに位置する。径100cmの円形で、深さ48cmを測る中型で深い土壌である。底面にある大礫は据えたものではない。埋土からは末葉を中心とした縄文中期の土器(12~16)が出土している。

5) 45号土壌

土壌群の中では北東端に位置し、楕円形で深い。土壌内中央の検出面付近に、拳2個大の礫3

点が、かたまっている。

6) 46号土壌

土壌群の北東端、45号土壌の東に位置し、ごく浅いビットの北隅を深いビットが切っている。縄文中期末葉の土器(16・17)の他、打製石斧2点、礫石錘1点が出土している。

7) 47号土壌

41号土壌の東に検出された楕円形の深い土壌で、1号集石の下に位置している。内部は片端がやや浅くなっており、深い方の底面は小さい。北東端の土壌検出面付近から、縄文中期中葉井戸尻Ⅰ式の完形土器(図23-6)が横たわって出土した(図版17-2957)。この土壌と関連した遺物としたい。

8) 53号土壌

用地西縁のA₂₆グリッドに検出された楕円形の土壌で、底面は円形となる。縄文中期初頭と末葉の土器(図33-23~28)が出土している。

9) 55号土壌

土壌群の最も南に位置する径100cmの円形の土壌で、縄文中期中葉から後期までの土器(30・31)と、特筆すべきものとして東縁で唯一の土偶の足の部分(図47-2)が出土している。

10) 59号土壌

53号土壌の北に接し、平面形は105×60cmの長方形に近く、南側がより深い。縄文中期初頭と末葉の土器9点(図33-32~37)が出土している。

11) 71号土壌

A₂₆グリッドに検出されたが、用地外にかかるため東側半分は調査してない。平面形は径140cmの円形と推定され、内部に小ビットがある。検出面より若干浮いた土壌中央に、縄文中期最末から後期初頭の完形土器2点(図23-7・8)が横たわって出土した。前者を曾利系最終末、後者は称名寺井行の最初頭とすることができ、興味深い。本址に関連した遺物としたい。埋土からは縄文中期末葉を中心とした土器片11点(図34-3・4)が出土している。

12) 72号土壌

2号集石下に検出された215×180cmの円形に近い楕円形の土壌で、検出面からの深さは14cmとごく浅い。位置はずれるが、2号集石との関連性も否定できない。

この一群の土壌のうち、土器が土壌と有意な関連性をもって出土し、所属時期を特定し得たのは、47・71号土壌の2基だけで、前者が縄文中期中葉、後者は縄文中期最末か後期初頭である。これ以外の遺物の出土した土壌の主体は中期末葉で、土壌群の上層にある遺物包含層の遺物を、そのまま埋土に含んでいるとしていいだろう。後述するが、中期初頭のまとまった資料を含んでいるにもかかわらず、この包含層が形成し始めたのは、縄文中期末葉の新しい時期と考えざるを得ず、土壌群の成立期も、中期末葉のうちであるとしておきたい。

東線土壌一覽表

番号	位 置	平面形	口 径 cm	底 径 cm	深さcm	備 考
33	A ₂ 26	楕円	45×40	20×15	10	中期初頭1 (図32-5)
34	A ₂ 26	"	75×45	20×10	12	内に小ビット。中期4 (初頭2) (6-9)
35	A ₂ 26	"	180×55	40×30	31	内に小ビット。中期7 (初頭3・末葉2) (10-12)、打石斧1
36	A ₂ 26	"	70×60	50×40	15	東側に小ビット
37	A ₂ 26	円	55×45	20×20	20	中期末葉2 (13-14)
38	A ₂ 26	"	140×130	90×90	44	底と壁に大礫。中期63 (初頭7・中葉4・末葉16)・後期4 (15-31)、打石斧・礫石錘・横刃・叩石各1、石鎌2
39	A ₂ 26	不整円	95×90	60×55	17	中期中葉1・末葉1 (図33-1)
40	A ₂ 26	"	65×55	25×20	31	中期末葉1 (2)・平安灰釉皿1
41	A ₂ 26	楕円	175×135	110×80	22	中期8 (初頭1・末葉3) (3-6)
42	A ₂ 26	"	140×90	100×60	25	内に礫4、焼土、東に接して小ビット、中期17 (初頭1・中葉7・末葉6) (7-11)
43	A ₂ 26	円	105×95	75×75	48	内に自然石、中期12 (末葉6)・後期1 (12-16)
44	A ₂ 26	"	55×50	35×35	37	
45	A ₂ 27	楕円	140×95	110×70	44	内の上面中央に礫3
46	A ₂ 27	"	90×70	65×40	36	中期4 (16-17)、打石斧2・礫石錘1
47	A ₂ 26・27	"	140×100	40×35	48	検出面の北東隅に中期中葉の完形 (図23-6)・中期3 (中葉1)
48	A ₂ 26・27	"	120×100	60×55	20	打石斧2・横刃1
49	A ₂ 27	"	55×50	20×20	16	
50	A ₁ 27	"	210×145	185×40	32	西に接して小ビット。中期中葉4・末葉3・後期1 (図33-18-22)
51	A ₁ 26	"	105×95	85×70	29	
52	A ₁ 26	"	70×55	30×25	22	
53	A ₂ 26	"	130×100	60×60	29	中期7 (初頭2・末葉4) (23-28)
54	A ₂ 26	円	85×80	30×20	37	中期2 (初頭1) (29)
55	A ₂ 26	"	100×100	55×50	43	中期中葉3・末葉3・後期2 (30-31)、土偶1 (図47-2)
56	A ₂ 26	不整	60×50	35×30	40	
57	A ₂ 26	長方	145×90	60×35	43	
58	A ₂ 26	楕円	95×65	55×35	39	中期中葉1・末葉2・後期1

59	A ₂ 26	楕円	105×60	70×30	37	中期9(初頭1・末葉5)(図33-32~37)
60	A ₂ 27	"	110×80	70×40	27	中期末葉3(図34-1・2)
61	D26	"	105×75	80×45	26	南側に小ビット。中期中葉3
62	D26	"	95×75	75×55	14	
63	D26	"	72×60	50×35	7	
64	D26	円	80×80	40×30	23	
65	D26	"	65×60	65×60	21	
66	D26	"	75×65	20×17	20	
67	E26	不整円	100×100	100×95	15	内に小ビット。
68	E26	楕円	80×70	25×25	14	
69	E26	"	125×85	35×30	24	
70	E26	—	—	—	20	用地外が多く細部不明。
71	A ₂ 26	円	140×(140)	110×(100)	28	上面に中期末~後期完形2・中期11(中葉2・末葉8)(図23-7・8、図34-3・4)
72	A ₂ 27	楕円	215×180	185×150	14	中期24(初頭12・中葉4・末葉2)(5~20)、打石斧3・磨石斧1
73	A ₂ 26	不整円	55×55	20×20	10	中期末葉2(21・22)
74	A ₂ 26	楕円	75×45	10×10	20	内に小ビット、中期末葉2・後期1
75	A ₂ 26	"	175×140	150×80	24	隣接して小ビット。中期31(初頭3・中葉5・末葉9)(23~39)、磨石斧1
76	A ₂ 26	"	165×155	95×80	17	中期20(中葉1・末葉13)
77	A ₂ 26	"	110×85	80×60		中期末葉2(40)

4 集石

1) 1号集石

A₂27グリッド南西の黒褐色土中に検出された礫の集まりで、この集石のある地点から南東方向には、次第に浅くなりながら黒褐色土中にも多量の礫がある。言いかえれば、包含層を掘り上げた時点で、A₂地区の南西隅から北東隅の方向へ走る広い溝状の地形が出現するのだが、その南東側の斜面の黒褐色土中に、多量の礫が存在しているわけで、1号集石を、それにつながる礫群上面が盛り上がった地点としてとらえることもでき、形態からも、自然に成立したものである可能性は強い。礫のまとまりは南北に長い3.0×2.4mの楕円形の範囲だが、比較的まばらで、面を形成する状態にもない。礫は上方がより大きい傾向にある。また、集石の下に2基の土壌があるのだが、それとの関連性も見出せなかった。

集石に伴う遺物はない。ただ、下部の土壌のうち47号土壌上縁には、中期中葉井戸尻I式の口

縁部を欠く完形土器（図23-5）が横たわっており、集石の成立時期はそれより新しいことになろう。

2) 2号集石

A₂27グリッド北西の黒褐色土中に検出された。付近に礫はなく、人為的に形成されたものと考えられる。平面形は北西と南西の欠けた円形とみることができ、その径は2.0 mを測る。礫の集まり方は非常に密で、ほぼレンズ状を呈している。礫の大きさは、径5 cmから人頭大までであるが、下方や、南隅、北隅などに小さい礫が集まっている傾向が指摘できる。礫の石質は、1号集石と同様、周囲の転石とかわらない。打製石斧の破片1点が混入していた。

下層には北にずれて72号土壇がある。大型にもかかわらずごく浅い点で特殊で、集石との関連性も否定できないが、検出時には、例えば土壇南壁が集石南縁までゆるく立ち上がるなどの、集石との関連性を直接示す状態は見出せなかった。集石下から72号土壇検出面までの間からは、縄文中期末葉を中心に初頭・中葉の土器が出土しており、2号集石の成立期は、縄文中期より新しいかもしれない。



図20 1号集石実測図

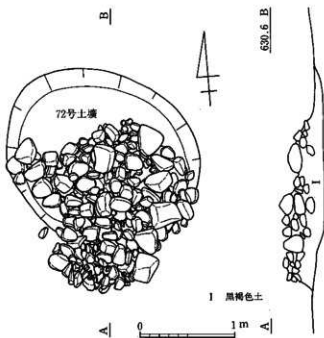


図21 2号集石実測図

5 ビット

A₂27グリッドほぼ中央の、黒褐色土上面で検出された径45cm、深さ35cmのやや袋状となる円形のビットである。埋土は単純な黒色で、中位からは極めて焼きの甘い四耳壺(図47-18)と、甕(19・20)のいずれも須恵器片が出土しており、中越遺跡では唯一の平安時代の遺構ということになる。埋土から縄文土器片が1点も出土していないことも、平安時代の生活面を考える上で注意されよう。

6 遺構外の遺物

東線の調査範囲では、A₁・A₂地区に厚い遺物包含層がある。その北側はA地区から包含層が急激に薄くなり、住居址埋土以外からはほとんど遺物が出土しなくなり、南側は、A₃地区の礫層といていい尾根状の微高地を経て、再び南東方向への傾斜面となっており、調査地南端のA₄地区から再び包含層が見られ始めるようである。北側は包含層自体が薄いというよりも、A-C地区が微高地であって、それが削平されたことによるのであろう。

包含層の下面は、A₃地区の南西隅から北東隅にかけてが最も低く、幅15mほどの北東方向へのゆるやかな溝状を呈している。この包含層の上には、A₂26グリッドに最も顕著に、耕作土との間に白色の砂層がある。下層との間には明瞭な境界面が形成されており、砂は、溝状の部分が埋没するころに、西の方からもたらされ、一帯をおおったものと考えられる。砂層の下は、堅い漆黒色土・黒色土・褐色土・黒褐色土を経て黄褐色土となっており、黒褐色土までのすべての層位から遺物は出土している。包含層の下には、先述した土壌群がある。遺物は、100点に満たない平安時代の遺物があるが、他は縄文時代の遺物である。

1) 縄文時代の遺物

遺物量は多い。土器は、約5500点あるが、20点に満たない前期と、3%の後期のほかは、すべて中期である。中期の中での細分は困難で、無文土器とあわせて分け切れなかった物の方が多いが、わかるものでは中期末葉が最も多く、中期初頭がそれに続き、北側に集落があるのにかかわらず、中期中葉が最も少ない。施文や胎土から抽出が容易であったとはいえ、中期初頭は、かなりまとまった量といえる。

約650点の中期初頭の土器は、A₂26グリッドから全体の半数以上が出土しており(図36-9~23、図37、図38-1・2)、A₂27(図40-1~24)・A₁26(図41-25~32)・A₁27(図43-15~22、図44-1~4)グリッドからもまとまって出土している。また層位的にみると、包含層の上層からが多く、西方でその傾向はより顕著である。つまり、前期初頭の土器は、分布の中心をさらに用地西方におき、中期末葉の包含層の上にかぶさるような状態で出土していることができる。図化できる状態のものがなかった点も注意したい。

一方中期末葉の約750点の土器は、量的にはA₁26グリッドが最も多く、A₁27、A₂26、A₂27グリッドと減少するが、それほど差はなく、層位的にも包含層の最下層から上層まで、まんべん

く出土している。完形土器(図24-9・10)や図化可能な土器(7・8)、大破片(図35-8、図38-21、図39-1・4、図43-1・5・6)があり、中期初頭の土器と異なり、まとまって廃棄されたものを含んでいるとすることができる。完形土器が層位的に集中する状況にはない。また、図化した土器はいずれも傾斜の下方である27列から出土しているが、大破片を含めると特にそうはならない。図化できたものは、いずれも把手を持つ土器や、アーチ状の把手を持ついわゆる「バケツ」型の土器で、破片の中にも把手部(図35-20・21、図36-6、図42-12、図44-26、図45-1・2)が多く注意される。また、台付土器の台の部分(図24-11)も目につく。土器そのものは、末葉の中でも、唐草文系から脱していわゆる伊那谷型の成立する末期(「長野県史」のIV期)が主体で、中期中葉からの変化は連続的でない。

中期中葉の土器は250点ほどで、A₁27グリッドに多く、A₁26、A₂26、A₂27グリッドにも30点以上あり、住居址のある北方に多いといえなくもないが、層位的に特徴を見出すことはできず、むしろ中期末葉の土器と混在しているとしか言いようのない状態にある。

縄文後期の土器は、いずれも小破片で全体形を知ることはできないが、磨滑縄文の発達した、古い時期のものが主体と考えられる。

これ等の土器に伴って、石鎌14点、打製石斧139点、礫石錘61点、部分磨製や敲打による調整を含む磨製石斧27点、敲打器10点、横刃型石器15点、粗大石匙4点、磨石・叩石5点、石皿1点の石器その他、若干の黒曜石剥片類が出土している。グリッド別にみると、A₂26グリッドに、石鎌7点、打製石斧40点、礫石錘36点とかなり集中しているが、土器の分布量を反映した現象としていだろう。

2) 平安時代の遺物

量的にはごくわずかで、包含層上層の漆黒色土と黒色土中から出土している。黒色土器(図47-9-13)と灰釉陶器(14-29)では傾向を異にし、前者は26列、後者は27列に多い。ただ、14の完形土器は、A₁26グリッドから出土している。図化できた須恵器のうち18-20はビットから出土したものである。ほぼ平安時代末期の遺物群であろう。

3) 包含層の形成時期

以上のような遺物の出土状況から、この包含層は、早くとも縄文中期末葉から形成され始めたものであり、それは平安時代末期まで、中断はあっただろうが続いていたと考えられる。そのうち、縄文中期初頭の遺物は、末葉の包含層が形成された後、あるいは形成末期に、二次的に、多分西方からもたらされたのものであろう。

第3章 発掘調査の成果とまとめ

西原土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和61年第1次の調査が行なわれてより今回で10次の調査となった。この縄文前期前半に位置する「中越遺跡」の分布範囲の確認は、この度の調査を通じて、遺跡全般的な記録保存と共に重要な研究テーマの一つである。これらの経過をふまえて今回の調査は行なわれた。発掘の成果から二・三の問題点をあげまとめたい。

1 村道中越北線は、中越遺跡の分布範囲を決定する上で重要な区域である。調査は先に作成された「中越遺跡調査図」に基いてその位置を付した。この地区は調査図ではM・N-22-65区に該当する場所である。この区間から検出された遺構は、N-33地点発見の2・3号縄文中期の住居址2軒、N-35-36区間発見の1号竪穴址と、M・N-22-65区間3号-32号の29基の土壌が検出された。これらの土壌の時期は遺物を伴わないものが大部分であったが、大方は縄文中期後葉頃と思われる。また、この区間からは縄文前期中越式が96点、神ノ木式が2点、東海系が10点、他が11点の合計113点が検出された。これ等縄文前期の土器の出土限はN-42-43地点が東端となった。その外に縄文中期の数多くの遺物を記録することができ、この区間の遺跡の状態を知ることができた。

2 次に役場東のグラウンドの東側南北に通ずる道路調査では、「中越遺跡調査図」Aから南へA、までとB-Eまでの区間幅12mの全体を調査することができた。この区間からは、縄文中期前葉から後葉にかけての1・4・5・6号の4住居址が発見された。また、竪穴址は2号・3号の調査ができた。その外土壌は1・2号・33-77号まで47基が調査できた。また、この区間からは集石2基も発見された。

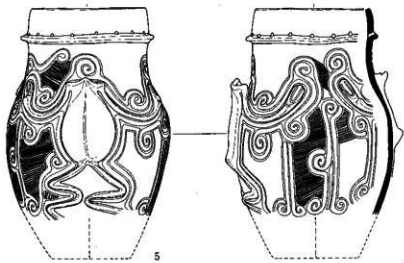
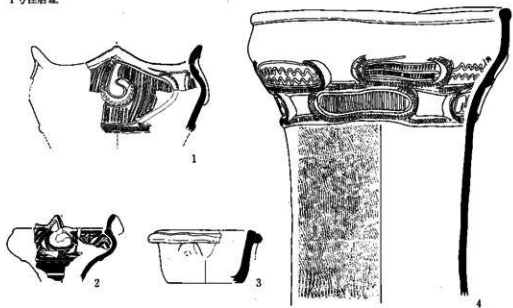
遺物は、縄文前期中越式が3点、神ノ木式が2点、東海系が1点、他が3点、合計9点が確認された。これら縄文前期の外に、縄文中期前葉・中葉・後葉、これに縄文後期が混在して発見された。その外に平安時代末期の灰釉陶器の発見があり、この当時の集落を考える一つの資料を添えてくれた。今回の調査の特筆すべきこととして出土遺物総数4314点余の地点記録がなされた事である。このことは、今後西原地区の開発に対する埋蔵文化財保護の貴重な資料となろう。

3 以上発掘の成果から、中越遺跡の保存区域の範囲は、中越北線N-42区画とそれより北WX-42を結ぶ線が考えられる。また、中越北線のL・M33地区に中越期の住居址が発見されているところより、それから西宮田村役場の南辺を結ぶ地域が中越期の分布範囲と推定され、これらを取り巻く幅30-40mの地帯に縄文前期の中越期の遺物が散布しているものと考えられる。

4 今回の調査に当って、県教委文化課・宮田村役場建設課・宮田村教育委員会・地元の調査に関係あった多くの皆様、また、発掘に直接にかかわった方々に対し心より御礼を申し上る次第である。

宮田村遺跡調査会長 友野良一

1号住居址



4号住居址

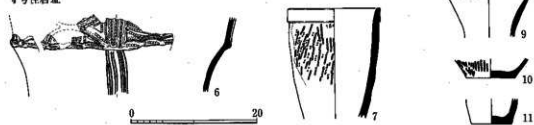
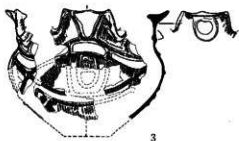
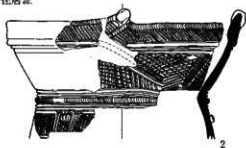


图22 1·4号住居址出土土器实测图

5号住居址



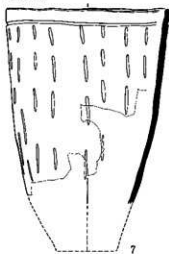
6号住居址



10号土壙



71号土壙



47号土壙



35号土壙



71号土壙



图23 5·6号住居址、土壙出土土器实测图

中越北線

東線

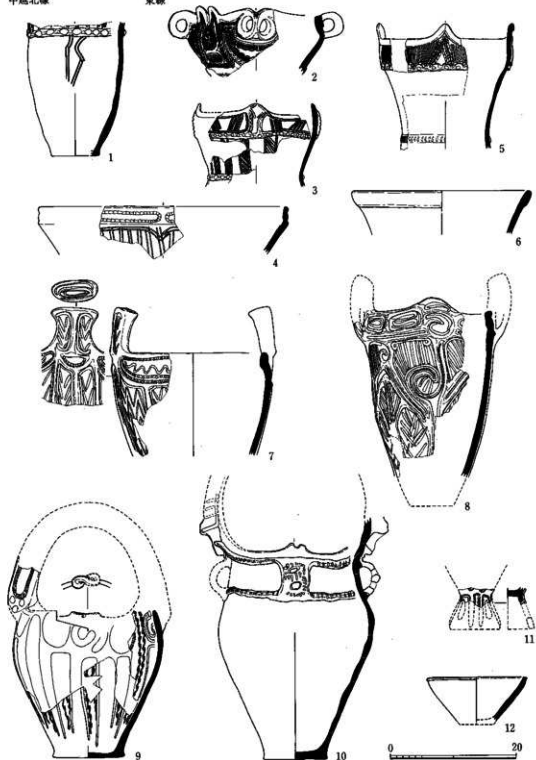
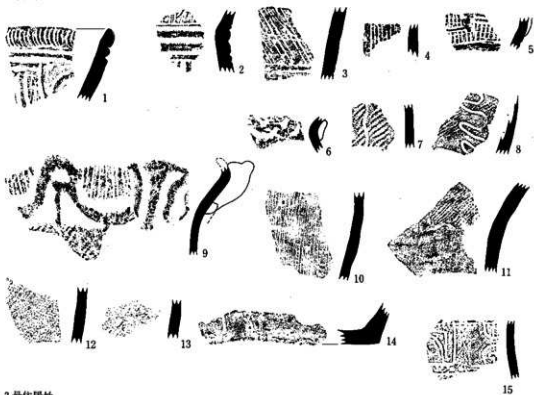
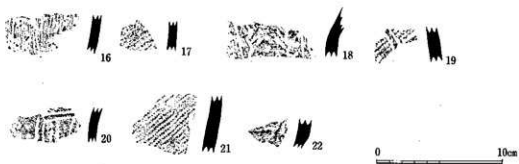


图24 遺構外出土土器実測図

2号住居址



3号住居址



1号整穴

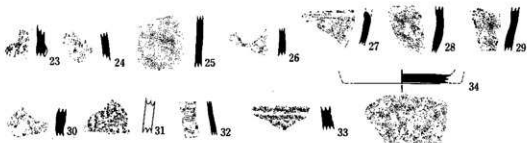


图25 2·3号住居址、1号整穴出土土器拓影

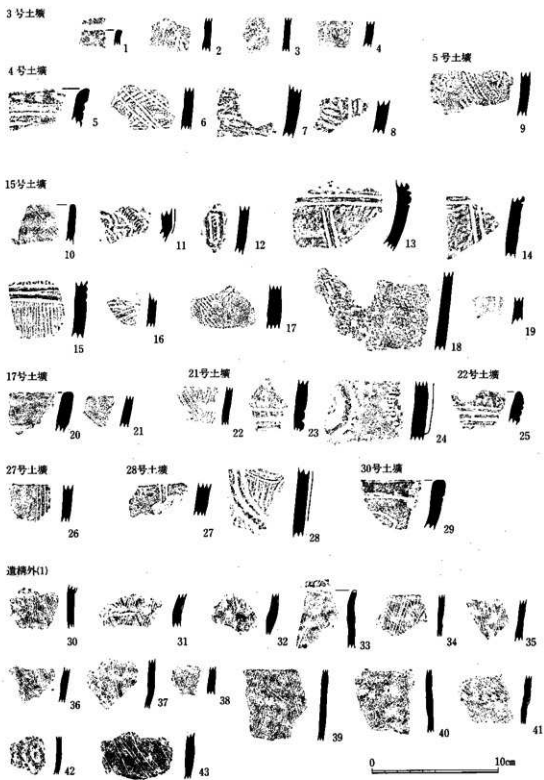


图26 中越北線土坑、遺構外出土土器拓影(1)

遺構外(2)

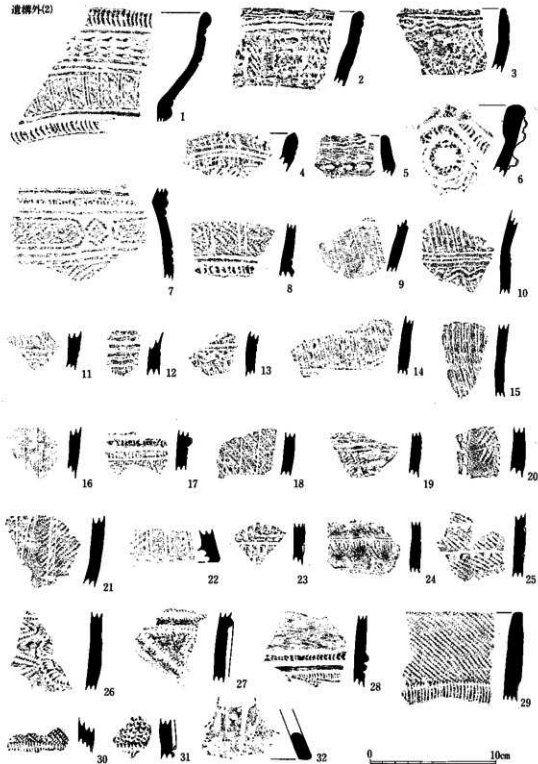


圖27 中越北線遺構外出土器拓影(2)

遺構外(3)

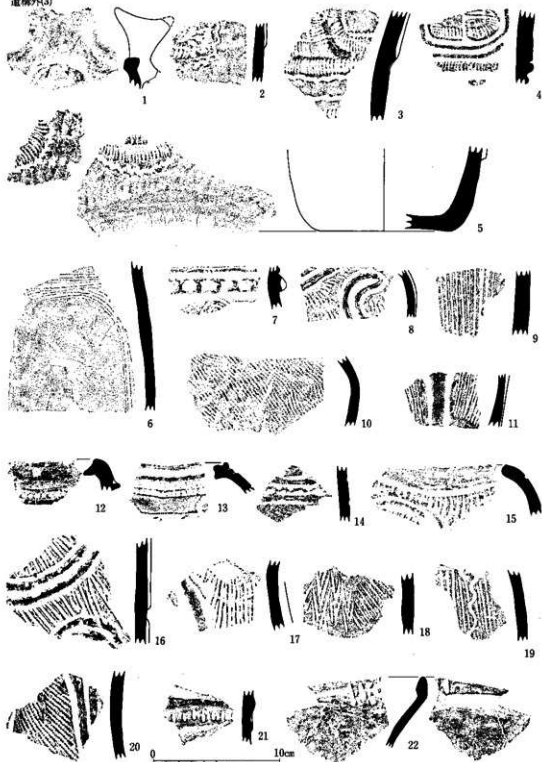


图28 中越北線遺構外出土土器拓影(3)

1号住居址

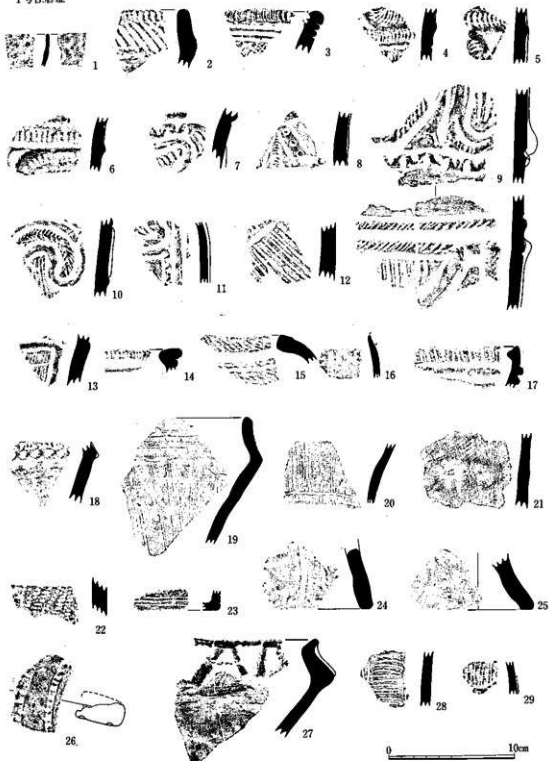


图29 1号住居址出土土器拓影

4号住居址上层

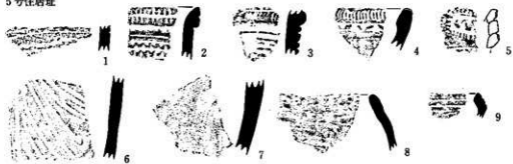


4号住居址下层



图30 4号住居址出土土器拓影

5号住居址



6号住居址

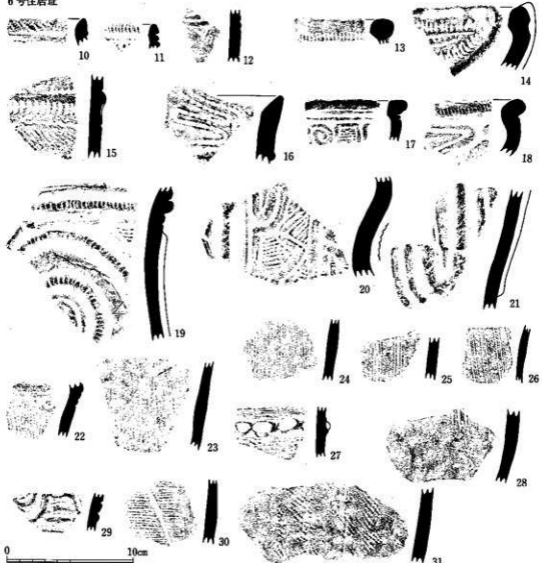


图31 5·6号住居址出土土器拓影

2号竖穴



3号竖穴



33号土坑



34号土坑



35号土坑



37号土坑



38号土坑

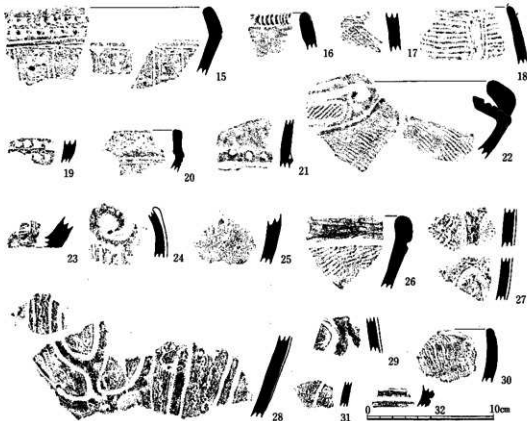


图32 2·3号竖穴、東線土坑出土土器拓影(1)

39号土壘



1

40号土壘



2

41号土壘



3



4



5



6

42号土壘



7



8



9



10



11

43号土壘



12



13



14



15

46号土壘



16



17

50号土壘



18



19



20



21



22

53号土壘



23



24



25



26



27



28

54号土壘



29

55号土壘



30



31

59号土壘



32



33



34



35



36



37



图33 東線土壘出土土器拓影(2)

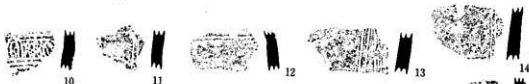
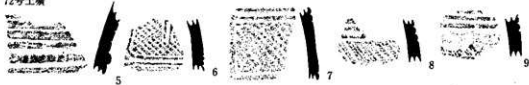
60号土壙



71号土壙



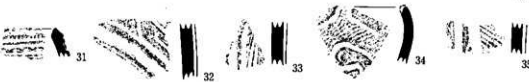
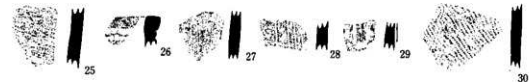
72号土壙



73号土壙



75号土壙



77号土壙

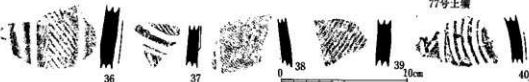
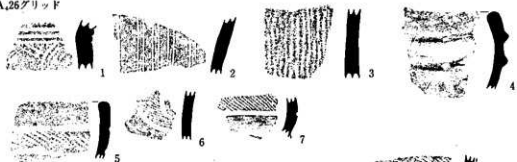
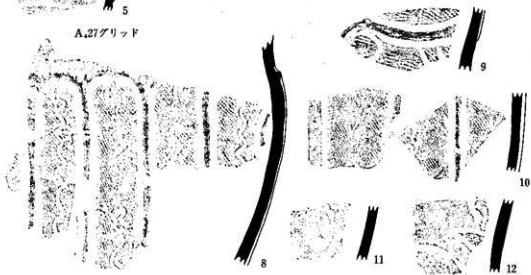


图34 东线土壙出土土器拓影(3)

A.26グリッド



A.27グリッド



A.26グリッド

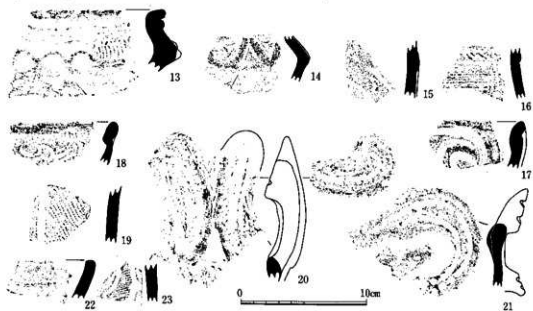
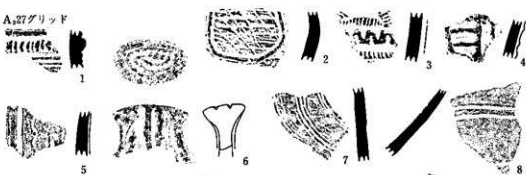


図35 東線遺構外出土土器拓影(1)

A₂₇グリッド

グリッド
MILLER



A₂₆グリッド(I)

グリッド



図36 東線遺構外出土土器拓影(2)

A₂₆グリッド(2)

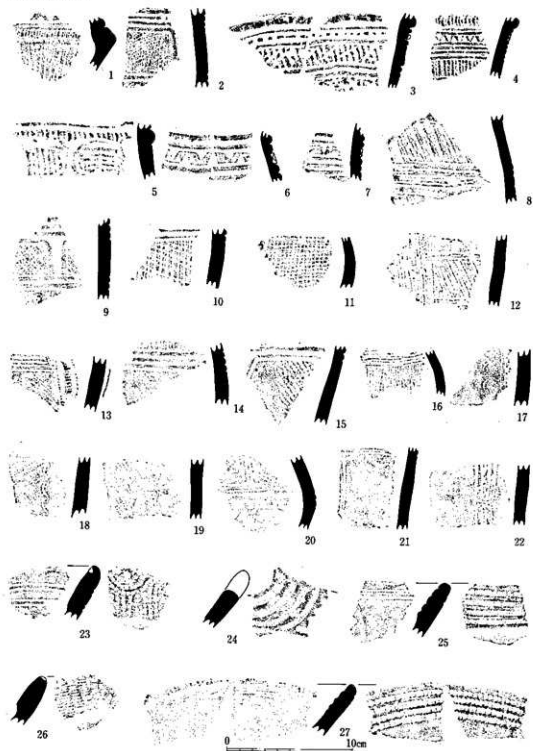


図37 東線遺構外出土土器拓影(3)

A.26グリッド(3)



図38 東線遺構外出土土器拓影(4)

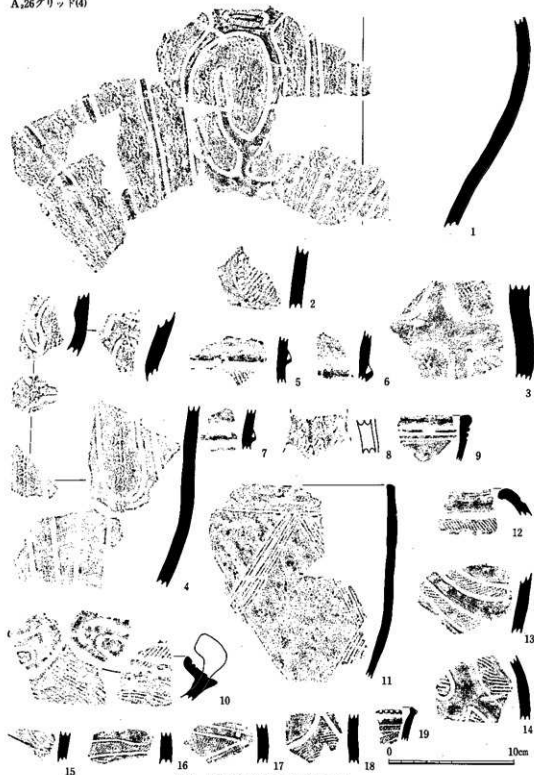


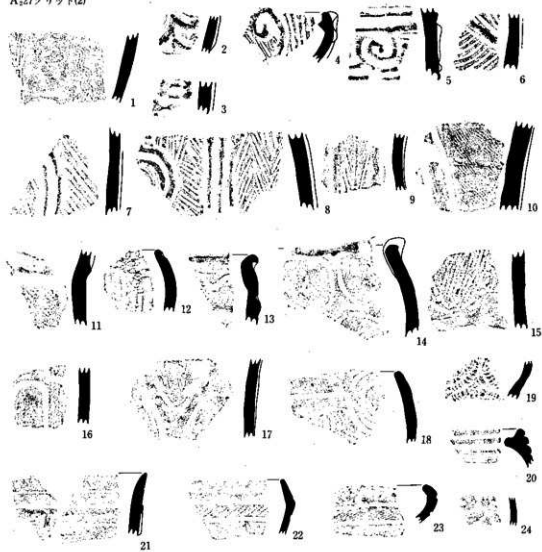
図39 東條遺構外出土土器拓影(5)

A₂7グリフ(I)



図40 東線遺構外出土土器拓影(6)

A.27グリッド(2)



A.26グリッド(1)

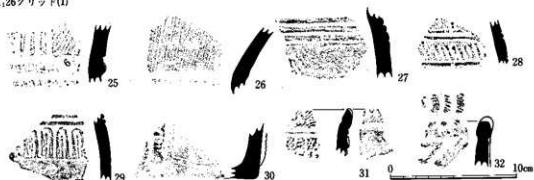


図41 東線遺構外出土土器拓影(7)

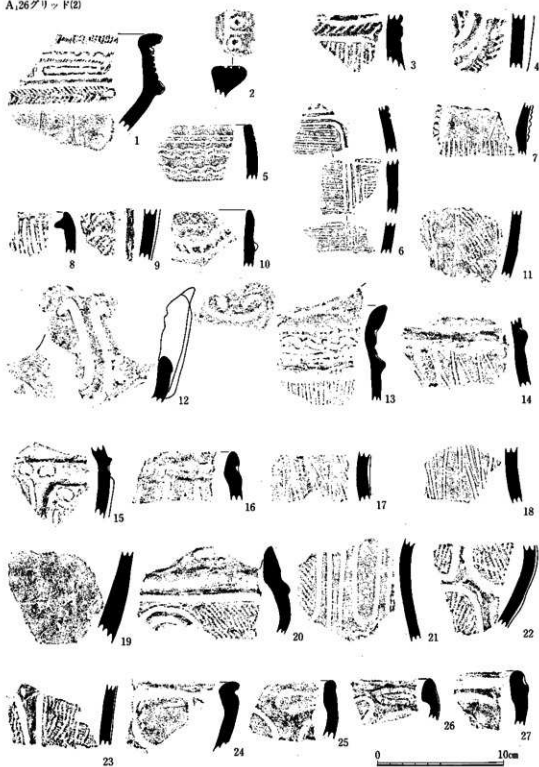
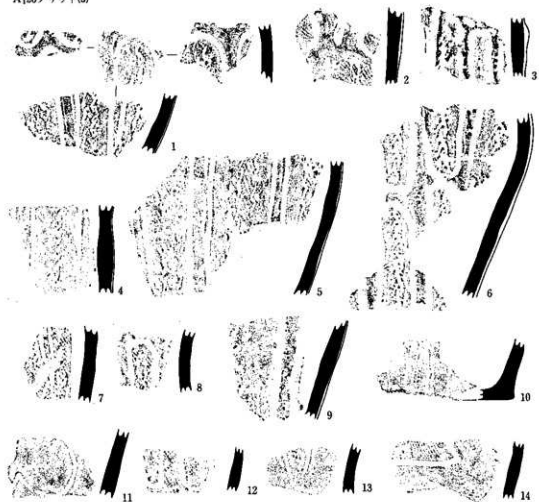


図42 東線遺構外出土土器拓影(8)

A,26グリッド(3)



A,27グリッド(F)

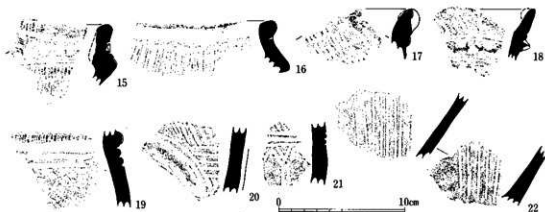


図43 東線遺構外出土土器拓影(9)

A,27グリッド(2)

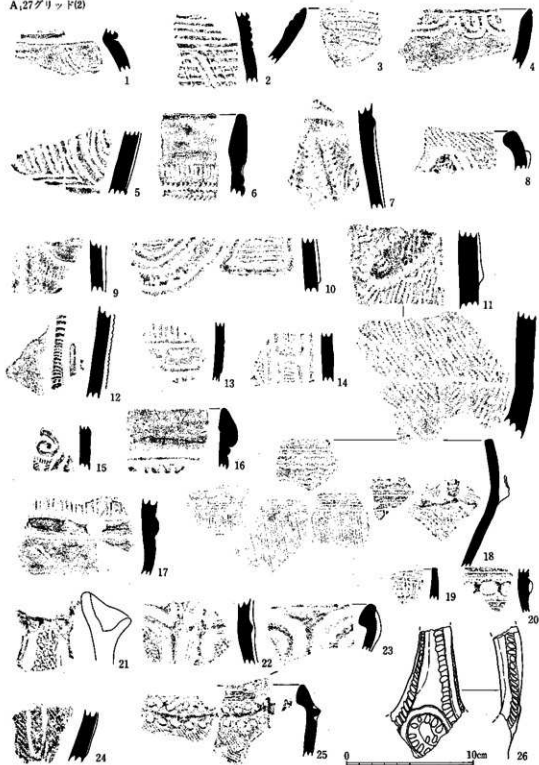


図44 東線遺構外出土土器拓影⑥

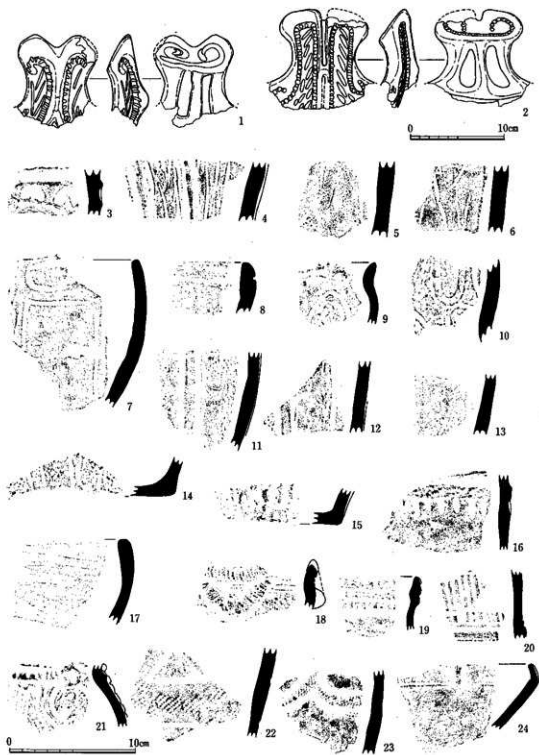
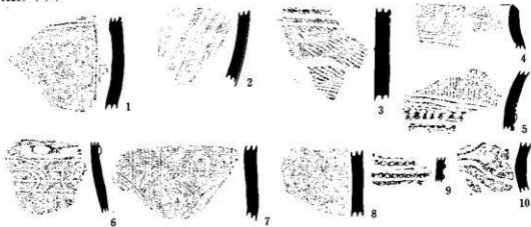


図45 東線遺構外出土土器拓影00

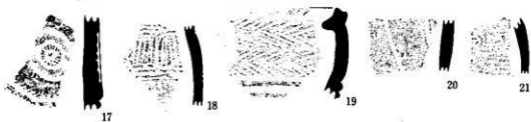
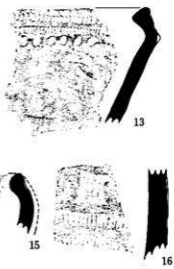
A26グリッド



A27グリッド



B26グリッド



D27グリッド

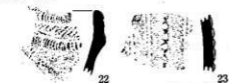


図46 東嶺遺構外出土土器拓影⑫

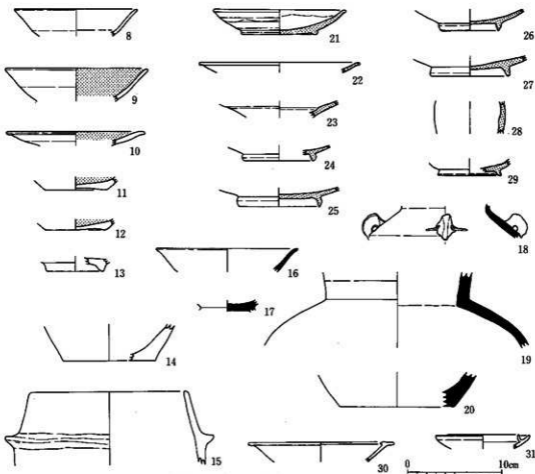
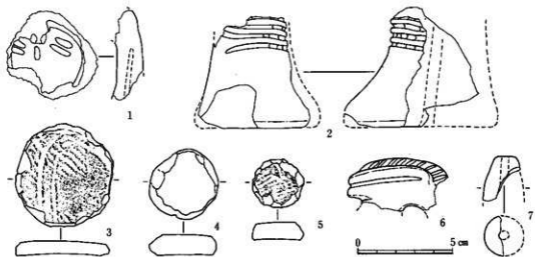


図47 土製品・平安時代の土器実測図

写 真 图 版



1号住居址調査中



1号住居址



2号住居址



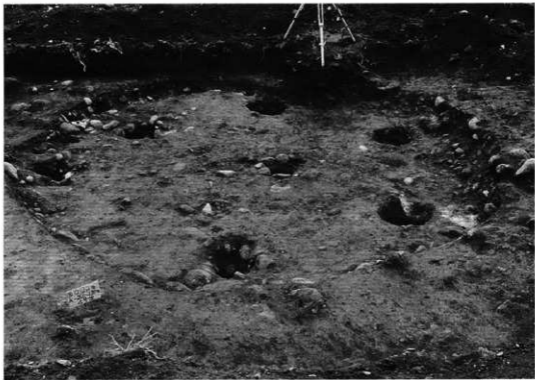
3号住居址



2号住居址炉址



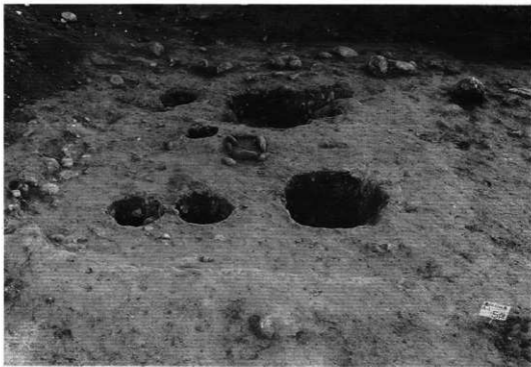
2、3号住居址



4号住居址



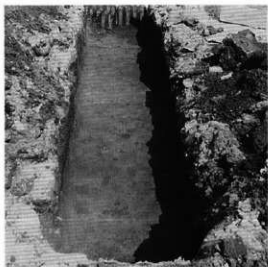
4号住居址遺物出土状況



5号住居址



6号住居址



M22・23地点



M28～30地点



M31・32地点



M34・35地点

図版六
遺構



M36・42地点



M43・44地点



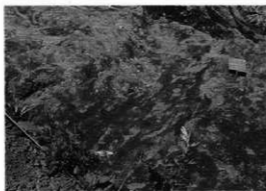
M47・48地点



M51～55地点



M57～59地点



M57地点溝状遺構



N22・23地点



N29~31地点



N31~33地点



N33-35地点



N34-37地点



N38・39地点



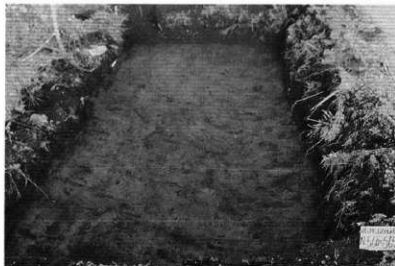
N43~45地点



N54地点



N55地点



N56地点



N57地点



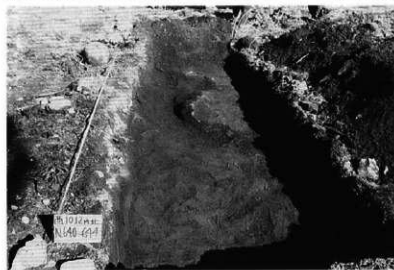
N57~59地点



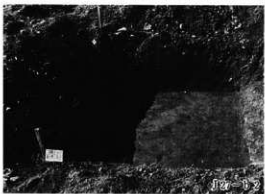
N60-62地点

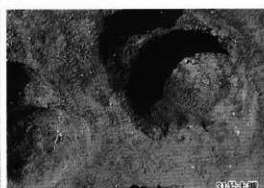
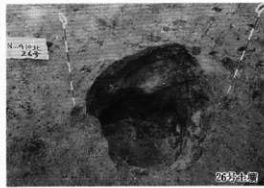
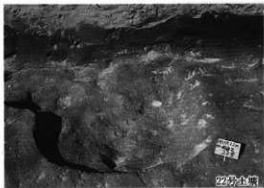


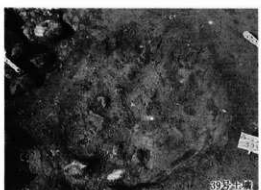
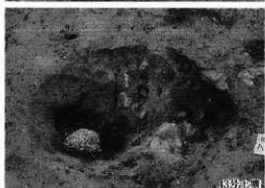
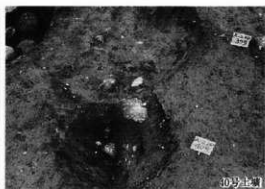
N62・63地点

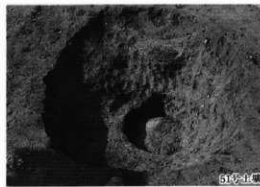
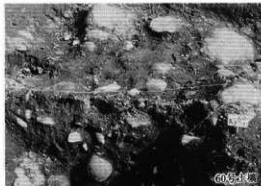
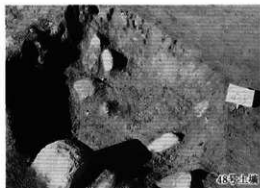


N64地点

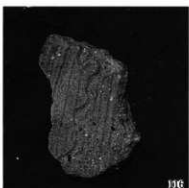


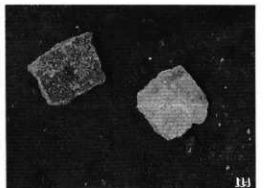
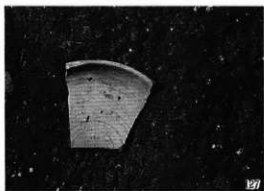
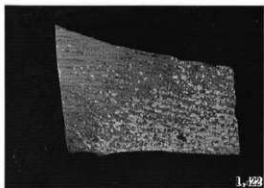














1号住鉢



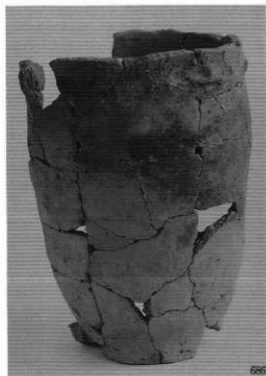
1号住伏甕

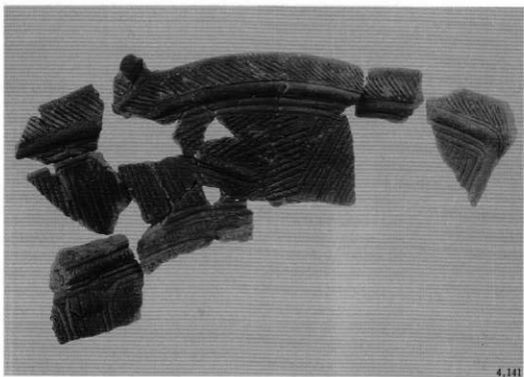


2,957

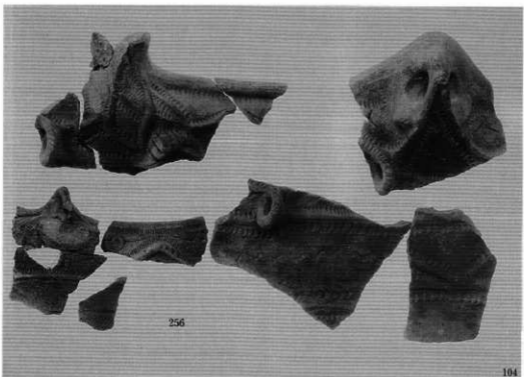


2,698



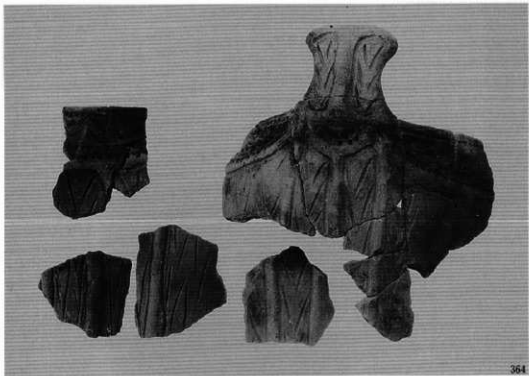


4,141

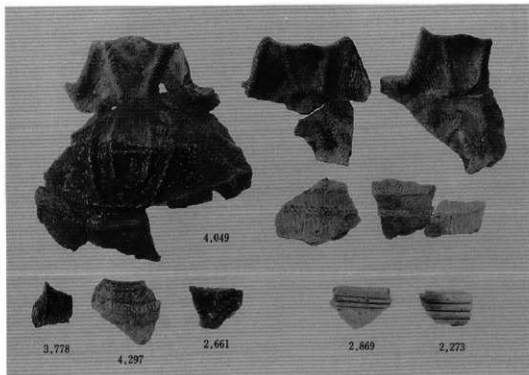


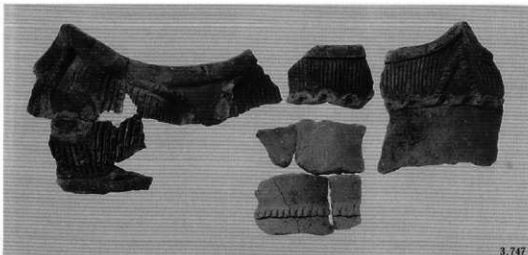
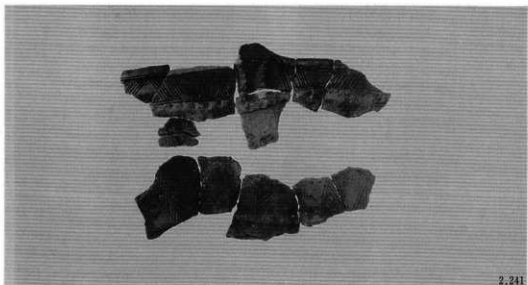
256

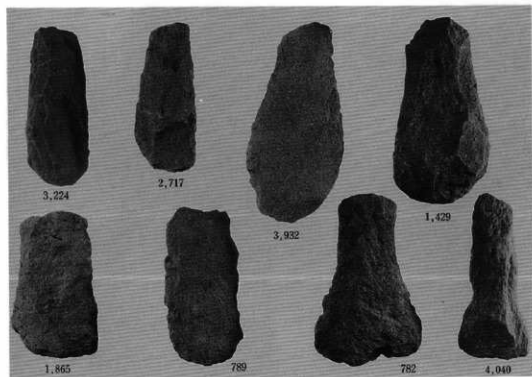
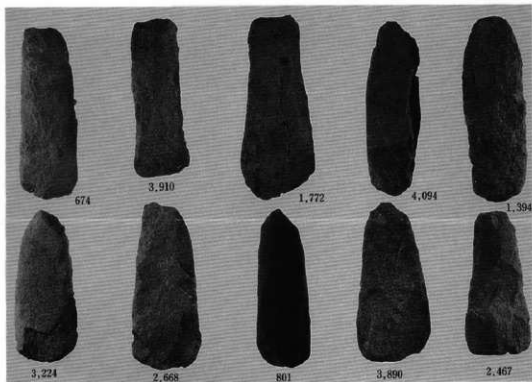
104

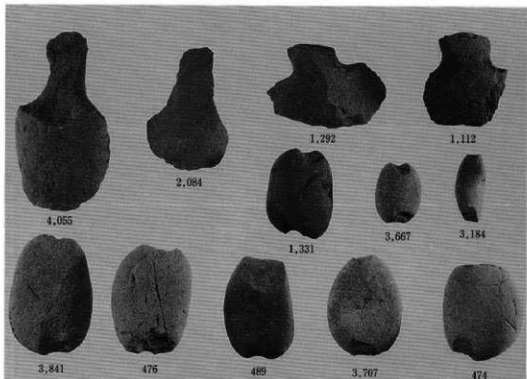


364

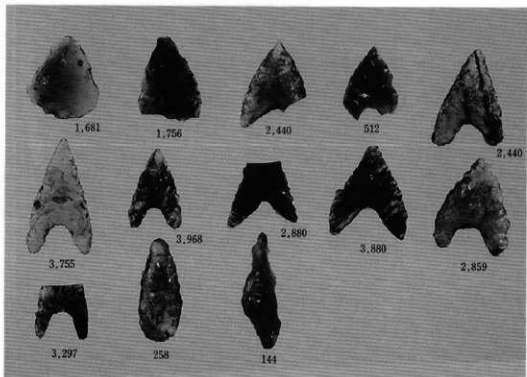




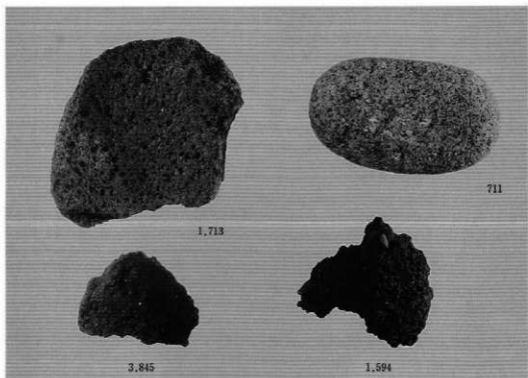




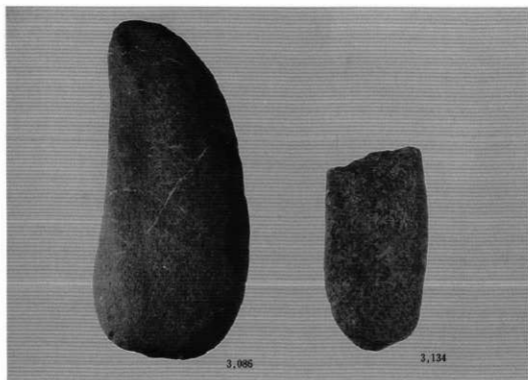
粗大石匙・礫石錘



石 錘



石皿・磨石・鉄さい



敲打器

西原十地区両整理事業第1工区

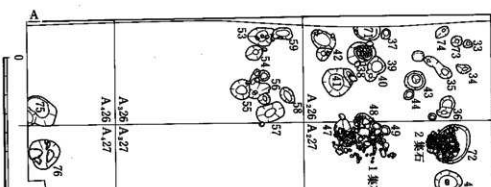
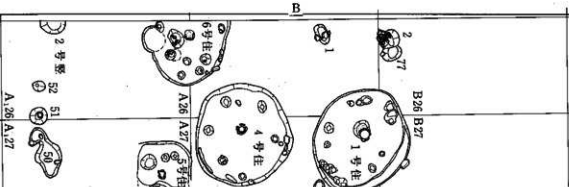
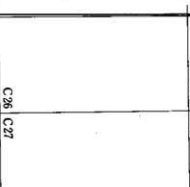
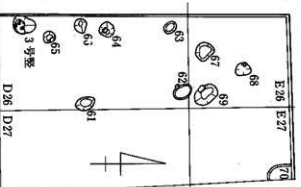
第10次発掘調査報告書
(中越遺跡)

平成3年3月31日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおずき書輪佛

長野市中越293



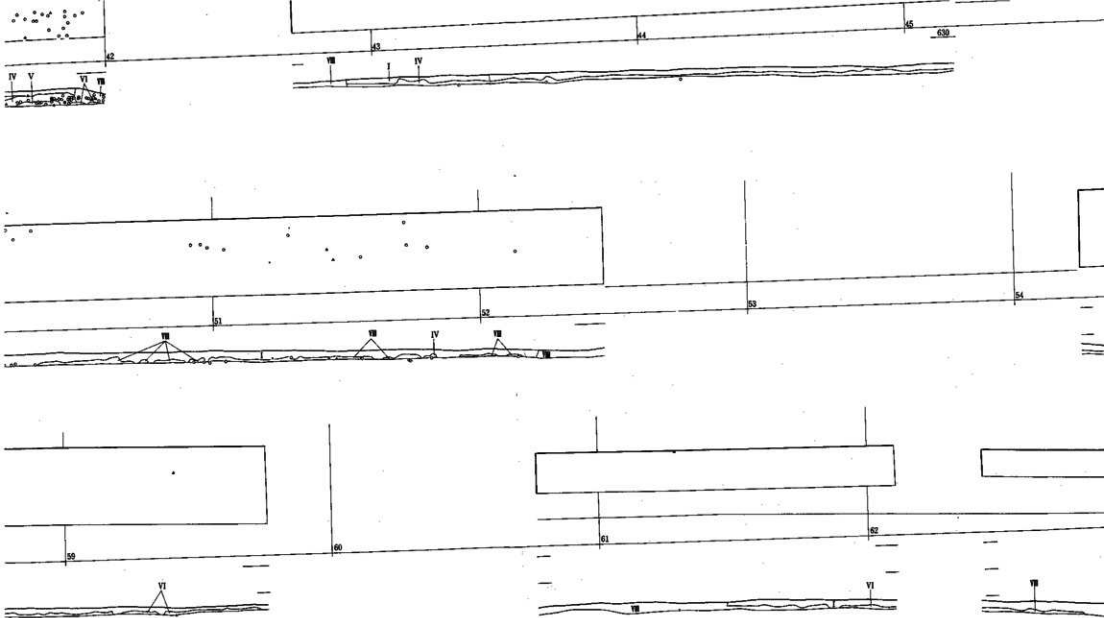
- I 耕土
- II 砂
- III 砂混り漆黒色土
- IV 漆黒色土
- V 黒色土
- VI 黒褐色土
- VII 褐色土
- VIII 赤褐色土
- IX 褐色土混入黒褐色土
- X 炭混入黒褐色土
- XI 礫混入黒褐色土
- XII 攪乱 (ロ-△粒混入黒褐色土)
- XIII 砂利



付図 2 東線遺構全体図

0

10m



付図1 中越北線北側全件調査遺物出土状態図

